



この曲は、カラオケなどで、若い人達にも好まれ、晩年の代表作と言っていい。やはり晩年の「われとわが身を眠らす子守唄」（詞：なかにし礼・曲：三木たかし）も、ジャズのテイストを、ポップスと邦楽でグルーミングして、ビッグバン化した、すごい名曲だ。晩年の4、5曲を聴いただけでも、彼女が、どれ程の天才であったかが解る。

知らず知らず 歩いて来た 細く長い この道 振り返れば 遙か遠く 故郷が----

（収集プロフィール）

美空ひばり（1937年（昭和12年）5月-1989年（平成元年）6月）は、数々のヒット曲を歌い、銀幕スターとしても多数の映画に出演した昭和を代表する歌手であり、女優。

もはや言うまでもなく、戦後最大の歴史的スーパースター、美空ひばり。彼女の存在は昭和歌謡史にとてつもなく大きな足跡を残したと同時に、激動の時代を生き抜いた日本国民の数少ない心のよりどころであった。その功績はあまりにも大きい。

49年、敗戦の喧騒のさなか弱冠12歳の天才少女、美空ひばりは「河童ブギウギ」にて登場。笠置シズ子の「東京ブギウギ」を下敷きとした、このデビュー曲は残念ながらヒットに繋がらなかった。がしかし、同年公開された初主演映画『悲しき口笛』の同名テーマ曲が爆発的ヒットを記録し、一躍スターダムへのし上がる。以降、ドメスティックな色合いの演歌歌謡楽曲を着実にヒットさせていく一方で、ジャズ/マンボ/ブルース/ロックンロール/ロカビリーなど、いわゆる洋楽テイストを大胆に導入し消化した、秀逸極まりない歌謡ナンバーを数多く世に残していった。また、50年代半ばより、江利チエミ、雪村いづみと共に“三人娘”として活躍。以後、脈々と受け継がれるイメージ戦略先行型三人編成アイドル・チームの礎となっていたのは言うまでもなからう。

女性として初の国民栄誉賞を受賞した。横浜市磯子区滝頭出身。愛称は御嬢（おじょう）。横浜市立滝頭小学校卒業。精華学園高等部卒業。本名は加藤和枝（かとうかずえ）。東京医科大学生が、家庭教師となり、学業の遅れを補った。

死後の1989年7月、長年の歌謡界に対する貢献を評価され、女性として初めてとなる国民栄誉賞を受賞し、息子の加藤和也が授賞式に出席した。

美空ひばり亡き後も続くエピソード

福島県いわき市塩屋崎 美空ひばり遺影碑、コモンズ画像1988年、福島県いわき市塩屋崎を舞台に作詞されたのが縁で、「みだれ髪」の（結果的にこれが最後のレコーディング曲となった）歌碑が建立された。ひばりの死後ここを訪れるファンが増え続け、1990年に新たなひばり遺影碑が立てられ、周辺の道路420m区間もいわき市が整備を行い「ひばり街道」として1998年に完成した。さらに2002年には幼少期のひばり主演映画「悲しき口笛」のひばりをモデルにした銅像も建立になった。現在は毎年約30万人のファン・観光客が、ひばりを偲んで訪れる。

2005年公開の映画『オペレッタ狸御殿』（鈴木清順監督）では、デジタル技術でスクリーンに甦りオダギリジョーやチャン・ツィイーと共演した。

主なシングル

河童ブギウギ(1949年)
悲しき口笛(1949年)
東京キッド(1950年)
越後獅子の唄(1950年)
私は街の子 (1950年)
あの丘越えて(1951年)
お祭りマンボ(1952年)
津軽のふるさと(1952年)
リンゴ追分(1952年)
ひばりのマドロスさん(1954年)
伊豆の踊り子(1954年)
波止場だよ お父つあん(1956年)
港町十三番地(1957年)
車屋さん(1958年)
哀愁波止場(1960年)
ひばりの佐渡情話(1962年)
哀愁出船(1963年)
柔(1964年)
悲しい酒(1966年)
真赤な太陽(1967年)
芸道一代(1967年)
むらさきの夜明け(1968年)
熱瀧 (いのり) (1968年)
人生一路(1970年)
ある女の詩(1972年)
一本の鉛筆(1974年)
さくらの唄(1976年)
雑草の歌(1976年)
おまえに惚れた(1980年)
裏町酒場(1982年)
笑ってよムーンライト(1983年)
残侠子守唄(1983年)
しのぶ(1985年)
愛燦燦(1986年)
みだれ髪(1987年)
川の流れのように(1989年)
など多数。

代表曲

柔(1964年) - 180万枚

川の流れのように(1989年) - 150万枚

悲しい酒(1966年) - 145万枚

真赤な太陽(1967年) - 140万枚

リンゴ追分(1952年) - 130万枚

みだれ髪(1987年)

港町十三番地(1957年)

波止場だよ、お父つあん(1956年)

東京キッド(1950年)

悲しき口笛(1949年)

最近、ジェロのアルバムに「水鏡」が収録されて、すこし注目されたが、知名度は30%も行かないだろう。明石家さんまの「まんま」に、ジェロが出たとき、この話題が出たが、さんまは全く知らない人、と言った。私も、何かのメディアで2、3度見たことがあるだけで、唄も2、3度しか聴いていない。取り上げるに当たって、ユーチューブで7、8曲、試聴した。予想より、ずっといい。特に「涙雨」「少年の如く」と「エトランゼ」が、心に響いた。静かな私小説、と言っていい世界。ほのかな哀愁と、分析的な回想。無理のない歌唱で、哀切を感じさせる高音と、基調をなす地声も耳障りがよい。それは、表面で、底には激しいものがあるのだろうが。

あの日のあなたの微笑を 思い浮かべている夜は---ひとりで演じているジュリエット---ため息まじり雨まじり 心を濡らす涙雨

(収集プロフィール)

鈴木 一平 (すずき いっぺい、1951年1月-) は、北海道札幌市出身のシンガーソングライター。

略歴

拓殖大学卒業。1974年、フォークデュオ・ラビを結成。シングル「青春碑」でデビュー。1979年、第17回ヤマハポピュラーソングコンテストに「時流」で出場し、優秀曲賞受賞。同年、世界歌謡祭出場。翌年、シングル「時流」をリリース。同年、リリースした「水鏡」が、ヒットする。現在は、ライブ中心に活動する傍ら、ラジオパーソナリティとしても活躍する。2008年、「水鏡」がジェロのミニアルバムCOVERSに収録される。

*80年に発表されたファースト・アルバムで、タイトルは彼の出身地である札幌の緯度。北島三郎や細川たかしなどに通じる歌いまわしのフォークということでは、松山千春と同じ味わいを持つ。そういえば伸びのある高音で気持ちよさそうに歌うところも似ている。

*演歌のリキんで、コブシを回すうたい方を軽くしていくと鈴木一平のヴォーカル・スタイルになる。鈴木一平は、'70年代のフォーク・ソングが若者たち向けの演歌だったことを教えてくれる。アレンジは大きく違っても、演歌は歌手が決め手。

主な曲

時流

水鏡

夕張川

悲しみの記

玄鳥

雨の糸

愛のララバイ

ひとり唄

アルバム

北緯43度

IPPEI II (今は誰に語ろうか)

北駅

首都圏のメディアでは、ときどき見かける程度であるが、数曲の中ヒットにより、全国的に一定の知名度はある歌手である。今回、7曲ばかり再聴してみた。北見をあまり評価しないエディターもいるが、私はかなりな表現力を持っていると思う。「淋しいね」のような唄になると、哀愁とともに、蓮っ葉な感じが出てしまうのは事実だけれど、その半分は北見の表現力なのだ。最も、たやすい解決策として、こういう曲は、なるべく避けたほうがいだろう。丁寧な歌唱の「こころ妻」「面影みれん」など、じっくり聴くととてもいい唄である。下の代表曲は、伝統の舟唄をふまえた、ゆったりとした流れのなかに、日本古来の、味わい深い情緒を醸し出している。

(作詞：松井由利夫、作曲：岡千秋)

この舟が 酒田港に 着くまでは わたしはあなたの こころ妻 紅花とかした 恋化粧 エンヤコラマカセの舟唄に 捨てて涙の 最上川----

(収集プロフィール)

北見 恭子 (きたみ きょうこ、1952～) は、山形県村山市出身の演歌歌手。

来歴

小さい頃から歌を歌うのが大好きだったと言う。中学1年生の時に山形放送『花の民謡相撲』ラジオコンテスト入賞。高校2年生で山形放送『ミス民謡コンクール』優勝。プロの歌手を目指して上京、昭和48年コロムビアより「夏の夜祭り」でデビューするがヒットに恵まれず、それから10年後の昭和58年に作曲家・船村徹に師事し、実力を蓄えた。その後、1992年発売の「紅の舟唄」が中ヒットとなる。

*所属のジョイ企画は、山形県の主要メディア3社(山形テレビ、山形放送、山形新聞)の主、服部敬雄の鶴の一声で、県出身の歌手の育成を目的として作られたプロ。1984年頃から山形県内で北見のプロモーションを行う。

海難事故支援

船村徹に師事した頃から、海難事故の支援活動に力を注ぐ。自主開催のコンサートではその収益金などの一部を義援金として、財団法人漁船海難遺児育英会へ寄付を行う。これらの活動が認められ、昭和60年に水産庁長官賞を受賞、さらに平成10年には農林水産大臣より感謝状を授与されている。

受賞歴

第23回全日本有線放送大賞「特別賞」を「浪速夢あかり」で受賞(平成2年)

第1回水産ジャーナリストの会「年度賞」受賞(平成5年)

平成16年30周年記念コンサートを池袋・芸術劇場で開催。

*「望郷夢のれん」「紅の舟歌」など、悲恋を感じさせる女の慕情を、たおやかな歌声で歌い綴っていく北見。こぶしのまわり具合もさることながら、流れるような歌声に、とても洗練された香りも。

*「紅の舟唄」貫禄あるあねご肌の太い声で人間臭さに好感が持てるが、荒っぽい節回し、少々

フラットする音程など、厳しさをあらためて感じさせられる歌唱。

* 「淋しいね」“歌謡曲”の歌手と呼びたい、北見恭子。70年代半ばから歌い続けているベテラン。日吉ミミ・タイプの「恋した女の飲む酒は」。誰タイプの、と感じるのは、彼女の色を鮮明にした決定打がまだないから。

* 「おんなの春」個性的な歌声が人気の彼女。ロングヒットを続ける好評の前作「大阪のれん」に続くシングル。彼女お得意の民謡を生かしたリズム演歌に。

* 「大阪のれん」は、北見の味のある歌声が胸に突き刺さる奥深い楽曲

男気溢れるとか、いわゆる兄貴系のカリスマ、として人気の高い、冠。その面は確かにあるが、映像等から受けるイメージに、それほどの男っぽさはない。むしろ、そこにほのかな哀愁や、侘しさをブレンドしたテイスト。それが冠の、本質だろう。男のさすらいを唄って、素晴らしいのは、そこに依拠するのだ。

冠のネオ演歌系の唄は、落ち込んだときに聴いていると、けっこう元気を貰える感じだ。よく聞く評価だが、これは私の実感。この所、ワイルドから遠ざかっているが、またぜひ唄って欲しいものだ。

(詞 三浦康照 曲 和田香苗 1998年)

狙った獲物は逃がさない この手に財宝を 握るまで 男はみんな 夢見る旅人だけど 世の中 そんなに甘くない GO GO GO----

(収集プロフィール)

冠 二郎 (かんむりじろう、1949年4月～) は演歌歌手である。埼玉県秩父市出身。埼玉県立秩父高等学校卒業。「炎」の大ヒットにより「ネオ演歌」「J-Enka」「アクション演歌」の旗手と目された。一日の鋭気を養う方法というテレビでの質問に「サウナです」との事。

来歴

三浦康照に弟子入り後、1967年「命ひとつ」でデビュー。しかしデビュー後10年間はヒットに恵まれず、1977年によく「旅の終わりに」がヒットしたものの「地味な歌手」というイメージを持たれ、苦節の時期を過ごす。

*「さすらいの旅」 マニアのなかでは、初期の名作として知られている曲である。黄昏たようなトランペットのプロローグから、さすらい旅の哀感を感じさせる詞とメロディーは、後の代表曲「旅の終わりに」に繋がる、テイストと深さを感じさせる。この系の流れは、「炎」「バイキング」とはまた違う、冠の素晴らしい持ち味である。

流れる雲よ伝えておくれ 思いを寄せるあの人に 旅路の夜のさみしさを 旅路の夜の空しさを---潮騒遠く海辺の宿で 眼をとじそっと夢追えば 帰らぬ恋が懐かしく 帰らぬ恋に泣かされる 孤独な俺に夕陽が落ちる どこかに---

*J-ENKERこと、冠二郎。不器用だが情熱のこもった歌唱、派手めのステージ・アクション、ショーマンシップあふれる礼儀正しい立ち振る舞い、に代表されるIt's Only 演歌, But I Like It, なパーソナリティは、全国の演歌ファンの心を大いに打つ。

*親しみやすい雰囲気がある男気系の歌に与えてる丸みが、きつとこの人の魅力。良くも悪くもギトギトした部分がない。

*男のさすらいを歌わせたなら彼の右に出る人はいない。叙情的なメロディに乗せたその歌からは、人生そのものをさすらっているような男の姿が浮かぶ。他人の曲だが「北へ帰ろう」「みちのくひとり旅」とかも似合う。

*驚愕だ。演歌界の“異端児”だけにそのシャウトぶり、ビビッドさには納得。リミックスは、コモエスタ八重樫が担当しシュールで熱い。

*義理人情の浪花節演歌で、この辺のわざとらしさが冠の強みで、最大の売り。それでいて“マイク二刀流”“バイキング”と斬新さでも事欠かない。

*男の純情一途さと意気かりを、真正面から歌い上げている冠。夫婦物の傑作「こころ花」をはじめ、ノロケに近いような台詞まで冠が歌うと、真面目で妙な説得力が漂う。

*酒と酒場や男のまごころをテーマにした楽曲集。冠の素軽いテンポと小粋で艶っぽい歌唱が心地よい。タイトル曲の「大文字」は、京の風物詩に託した男の思いがしみじみと伝わり、「無法松の一生」では男気あふれる歌声が豪快に響く。

*シャープでドラマチックに盛り上がるストリングスや軽快な祭囃子にのって、男気にあふれる歌唱がたっぷり楽しめる全曲集。

*作詞・三浦康照、作曲はもう一人の師匠・作曲家 和田香苗による「炎」のリリースにより、「アイ、アイ、アイライク演歌」の一節が、脚光を浴び「演歌」のイメージを変え、若者の支持も受けるように。冠自身のユニークなキャラクターも愛され、TBSラジオ「コサキン快傑アドレナリン」やテレビ朝日系「ナイナイナ」などにも出演し好評を博す。畳みかけるように「ムサシ」、「バイキング」と新機軸の「ネオ演歌」を次々とリリース。さらなる活躍が期待された。

彼のイメージを変えたネオ演歌シリーズも、和田香苗の死去により頓挫した形となっている。以降は再び「ど演歌」路線に回帰。「カムムラー」と呼ばれるファンをやきもきさせる。

ネオ演歌とまではいかないまでも、実在の居酒屋チェーンとタイアップした「酔虎伝」シリーズや、「望楼の果て」「燎原の狼」といった伝記もの、演歌歌手としては異例の特撮テレビ番組『燃えろ!!ロボコン』のエンディング「歌は世界を救う!!」までユニークな作品をリリースし続けており、保守的な演歌界にあって、中堅どころとして独特のポジションを得ている。

2005年頃より通信カラオケシステムDAMの機種改良に伴い、同機種で配信する冠の代表曲（「炎」等）で背景映像に冠本人が出演する映像が多く採用されている。

主な曲

旅の終りに（1977）

のぼり竜（1990）

酒場（1991、紅白歌合戦初出場曲）

炎（1992）

ムサシ（1992、マイクを「二刀流」で唄う）

バイキング（1998、オリジナルビデオ「熱血二代目商店街」主題歌。また、ナムコのゲーム「トラック狂走曲」にBGMとして収録。）

ほろよい酔虎伝（2005）

ブラボー酔虎伝

天命

望楼の果て

波濤万里

満天の星

兄貴

太陽に叫ぼう

香西かおりと並んで、石川さゆりの次に位置する歌手である。そして、すでに7曲の名曲と10曲前後の佳曲をもつ、大歌手でもある。股旅からポップスまで、器用に幅広く、自在なテイストで唄いこなす。そこが、坂本の凄みであろう。いわゆる演歌5人娘のなかで、総合力で文句なくトップであり、リーダーである。唄だけに絞ると、香西が肉薄しているが、スケールの雄大さ、自在さ、取り組みの幅の広さなどでは圧倒している。私は声質と唄の深さ（坂本よりも、適応範囲はぐんと狭いが）では、香西を買うが、坂本のそのオールマイティな、大きな存在感には所詮敵わない。

淀の水さへ 流れては 二度と逢えない 浪花街---夢と意気地に 酔わされて 命もやした 淀屋橋

（収集プロフィール）

坂本 冬美（さかもと ふゆみ、1967～ ）は、和歌山県西牟婁郡（にしむろぐん）上富田町出身の歌手。1985年 和歌山県立熊野高校卒。

*細野晴臣、忌野らとの異色ユニット「HIS」に参加、またポップスにも挑戦、演歌の枠にとどまらない活動を展開。森進一、マルシアなどを輩出した、猪俣公章一派出身である彼女は、87年、デビュー・シングル「あばれ太鼓」がすかさずヒットを記録、幸運なスタートを。自立した女性の生き様を描いた歌を得意とし、強さと妖しさの両方を併せもった歌唱で多くのファンを獲得。そして94年には斬新なバック・トラックを導入したプログレッシヴ演歌「夜桜お七」がヒット。現在もテレビ／舞台に大活躍。21世紀の演歌界を引っ張るニュー・リーダーとして大いに期待されている。

主な曲（Aは名曲・他は佳曲） 詞 曲

Aあばれ太鼓	1987・3	たかたかし	猪俣公章
A祝い酒	1988	同上	
A男の情話	1989	松井由利夫	猪俣公章
能登はいらんかいね	1990	岸本克己	猪俣公章
火の国の女	1991	たかたかし	猪俣公章
A男惚れ	1992	星野哲郎	猪俣公章
A夜桜お七	1994	林あまり	三木たかし
蛍の提灯	1995	阿久悠	宇崎竜童
A大志（こころざし）	1997	たかたかし	市川昭介
A風に立つ	1999	たかたかし	弦哲也
凜として	2001	たかたかし	徳久広司
播磨の渡り鳥	2004	松井由利夫	水森英夫
また君に恋してる	2009	松井五郎/中村あゆみ	森正明/中村あゆみ

所謂、男唄で人生の応援歌であろう。坂本の得意とする分野、である。声質、節回しからいって、尤もな選択であろう。新鮮さを感じさせる、現代的なのばし（みち～は～つうく、のパート）と、要所での力強い唸り。聴き終わったあとの、快さ。現在、ポップス系でヒット中の、「また君に恋してる」を聴いてみた。なかなかソフトでエキセントリックな想念があふれて、悪くない。だが、坂本が真骨頂を発揮できるのはやはり演歌・歌謡曲系の楽曲であろう。

（詞・たかたかし 曲・市川昭介）

男ふりだし ないないづくし 汗水ながして 道はつく 人に頼るな ぐちるな泣くな 今日の苦勞を 積み上げて 明日はでっかい 山になれ---桜吹雪の 舞う坂道を 行くも男の 心意気

（収録プロフィール）

坂本 冬美（さかもと ふゆみ、1967年3月～ ）は、和歌山県西牟婁郡（にしむろ）上富田町出身の歌手。

概要

NHKの『勝ち抜き歌謡天国』（和歌山大会）で名人となり、審査員だった猪俣公章の内弟子となる。マルシアは坂本の妹弟子にあたり現在でもとても仲が良いそう。それまでは、地元・和歌山の梅干し工場で働いていた。

1987年に「あばれ太鼓」でデビュー。初期は同曲の他、「男の情話」「男惚れ」など男歌が中心だった。

1991年に細野晴臣、忌野清志郎とHISを結成。アルバム『日本の人』発売。

2002年3月に持病の膵臓炎の治療専念など諸事情により、歌手活動を含めた一切の芸能活動を休止。休業前に坂本の自宅を猪俣の妻へ売り渡し、その後実家の和歌山へ一時期戻った。実家から全国各地へ旅行や温泉へ行ったりしてのんびりと一年間休養。それから丁度1年後の2003年4月、芸能活動の再開を宣言。

人物・エピソード

家族構成は母、姉、弟で父は故人。現在も私生活では独身を通す。

仲の良い伍代夏子や藤あや子からは「マメちゃん」と呼ばれている。理由は、まめな性格である事から。

シングル・初期略

19 大志 1997.03 たかたかし 市川昭介

20 ふたり咲き 1998 麻こよみ 岡千秋

21 風に立つ 1999 たかたかし 弦哲也

22 夜叉海峡 2000 荒木とよひさ 弦哲也

23 風鈴 2000 荒川利夫 花笠薫

24 凜として 2001 たかたかし 徳久広司

25 男侠 2002 たかたかし 岡千秋

26 うりずんの頃 2002 永井龍雲 永井龍雲

- 27 気まぐれ道中 2003 たかたかし 岡千秋
- 28 忍冬 2003 内館牧子 平尾昌晃
- 29 播磨の渡り鳥 2004 松井由利夫 水森英夫
- 30 陽は昇る 2005 たかたかし 岡千秋
- 31 Oh, My Love～ラジオから愛のうた～ 2005 忌野清志郎 細野晴臣
- 32 ふたりの大漁節 2005 やしろよう 花笠薫
- 33 羅生門 2006 新本創子 浜圭介
- 34 秋まつり、お月さま 2006 グディングス利奈 G.SATO
- 35 雪国～駒子 その愛～ 2007 たかたかし 弦哲也
- 36 紀ノ川 2008 たきのえいじ 弦哲也
- 37 また君に恋してる／アジアの海賊

雄大な情景と、つつましい人々の日常。そのせめぎ合いと、問いかけ。日本人の、原点に迫るような、詞と曲調。雄大なメロディーが、浪漫を感じさせる。

(詞：小椋佳 曲：堀内孝雄)

人は皆 山河に生まれ 抱かれ 挑み 人は皆 山河を信じ---ふと想う 悔いひとつなく 悦びの山を
築けたろうか----

(収集プロフィール)

五木ひろし（いつきひろし、1948～ ）は、歌手、作曲家である。福井県三方郡美浜町出身。明治大学付属中野高校卒業。

ジャパニーズ・ソウルの帝王、五木ひろし。71年の「よこはまたそがれ」のヒット以来、30年近くも演歌界の頂点に君臨する大物シンガーである。精密機械のごとく、巧妙に声を震わす独特の歌唱法、そして、あの右手と腰をシェイクさせるアクの強いステージングは、名人芸。

経歴

1964年、第15回コロムビア全国歌謡コンクールにて優勝。

作曲家・上原げんとにスカウトされ、内弟子となる。

1965年6月、コロムビアから<松山まさる>名義で「新宿駅から/信濃路の果て」でデビューするも、全くヒットせず。以後6年間に亘って不遇の時代を過ごす。この間に二度も芸名を変更している。コロムビアではシングルを計6枚発売。

1967年4月、ポリドールへ移籍。<一条英一>に改名して「俺を泣かせる夜の雨」（B面は愛田健二）で再デビュー。ポリドールではシングルを計3枚発売。

1969年12月、ミノルフォン（現在の徳間ジャパン・コミュニケーションズ）へ移籍。<三谷謙>に改名して「雨のヨコハマ/東京-長崎-札幌」で再デビュー。<三谷謙>名義でのシングルはこの1枚を発売しただけに終る。

1970年、歌手生命のすべてを賭けてオーディション番組「全日本歌謡選手権」（長沢純 司会）に「三谷謙」の芸名付きで出場。初挑戦時には、「これで駄目なら、ふるさとの福井に帰って農業をやる」と悲壮な覚悟の程を語っていたが、見事10週連続勝ち抜きグランドチャンピオンに輝き、歌手として再デビューできる権利を獲得。同番組の審査員であった作詞家・山口洋子と作曲家・平尾昌晃に師事。プロデューサーには山口洋子が就任。

1971年3月、<五木ひろし>に改名して「よこはま・たそがれ」で再デビュー。<五木ひろし>は山口洋子が作家・五木寛之氏から苗字を頂いて命名。「よこはま・たそがれ」は山口・平尾コンビで作られ、単語の羅列ながらも<女ごころ>が巧みに表現されている。作曲家・平尾昌晃にとっては初の演歌作品。オリコン・シングル週間チャートで最高位1位、登場週数46、売上げ枚数64.2万枚を記録する大ヒットとなる。

<港町>をテーマにした「長崎から船に乗って」も44.5万枚を売上げ、連続ヒット。

これまで男性歌手の演歌はといえば、ド演歌、任侠もの、民謡調、浪曲調、女の情念や酒場を描いた暗いブルースくらいしかなかった。そういうところに抜群の歌唱力をも持ち合わせた若い五

木が登場してきたため、モダンでソフトな演歌に飢えていたファンが「待ってました！！」とばかりに飛びついたのはいわば当然のことである。

「よこはま・たそがれ」で第2回日本歌謡大賞（同大賞は第24回限りで廃止）放送音楽賞、第13回日本レコード大賞歌唱賞をそれぞれ初受賞したほか、念願であったNHK紅白歌合戦（第22回）への初出場を果たす。以降、現在まで連続出場を継続中。

1972年、「かもめ町港町」は前作同様、〈港町〉をテーマにした演歌ながらも、敢えてアイドル歌謡を中心に手懸けていた筒美京平を起用。

〈ポップス演歌〉とプロモーションされた第1弾「待っている女」がヒット。

第2弾「夜汽車の女」は前作の続編的性格を持ち、スマッシュ・ヒットに終る。

この頃テレビ歌謡番組では、人懐っこい「細い目」を再三に亘り司会者などから茶化されるが、それを毎度軽妙に切り返して笑いを誘うなど、コミカルな部分をも持ち合わせていた。

つづく「霧の出船」、〈叙情演歌〉の名曲「ふるさと」、スケールの大きなポップス演歌「夜空」とすべて平尾作品で通しながらも、一作一作に趣向が凝らされており、出す曲出す曲すべてがヒット。一年を通じて活躍。

「森進一はデビュー以来、〈ためいき路線〉と形容されるほどに女の情念や酒場をテーマに掲げて歌ってきたが、その暗い曲調がこのところ飽きられつつあり、スランプ気味であった。そこで、森の師匠でもある作曲家・猪俣公章が五木の大躍進に刺激を受けて、モダンな演歌を模索、起死回生で放った「冬の旅」が大ヒット。これにより森がトップ歌手の座に返り咲いたという経緯がある。

1974年、第3回東京音楽祭国内大会では「別れの鐘の音」が演歌としては初めてゴールデン・カナリー賞を受賞。同世界大会へも演歌歌手としては初めて出場して、外国審査員団賞を受賞。この年の勝負作となる「浜昼顔」は五木自身の「〈古賀メロディー〉を自分の持ち歌にしたい」という強固な意志が、「古賀政男＝コロムビア専属」という〈レコード会社の壁〉を乗り越えて誕生。しかし全くの新曲という訳にはいかず、古賀政男が藤山一郎と青木光一にかつて提供した曲（それぞれ「さらば青春」、「都に花の散る夜は」）にリメイク（手直し）を施したものに留まる。

「紅い花」と「明日の愛」は前述の「旅鴉」などと同様、ヒットさせることを目指した作品ではなく、テレビドラマの主題歌としてリリースされたものであることからテレビ歌謡番組等では積極的に披露してはいない。

第5回日本歌謡大賞では「浜昼顔」で放送音楽賞を4年連続受賞。一方、第16回日本レコード大賞では「みれん」で歌唱賞を4年連続受賞。そして第16回日本レコード大賞最優秀歌唱賞を初受賞。この年の森進一との頂上決戦は熾烈さを極め、〈日本レコード大賞史上最大の激戦〉として語り草となっている。ミノルフォンは、1965年に作曲家・遠藤実自らが創業してまだ十年にも満たない新興レコード会社で、〈レコード界の第8勢力〉と云われていた。当時はまだ山本リンダや千昌夫（いずれも遠藤実の内弟子）くらいしか名の通った歌手が在籍しておらず、弱小レコード会社と目されていた。まともに勝負しても勝ち目はなかった。最終的には、前年に大賞を獲得している五木が、まだ受賞していない「最優秀歌唱賞を欲しい！」と宣言することによって、これまで

に大賞候補として4年連続で(1968・1969・1970・1971年)ノミネートされながらもすべて逃しているところから「今度こそは何が何でも大賞を！」と意気込む森に大賞を譲ったものと云われている。

前述したが、賞によってその年の＜受賞曲が分かれる（食い違う）＞ことがこういった重大な局面では弱点ともなり得るということを指摘しておかなければならない。

五木と森は人気と実力を兼ね備えた＜男性演歌の旗頭＞として並び称せられるほどに成長。年齢が同じ、歌唱力が同等、ジャンルが同じ、曲調も似ている、女ごころを歌わせたら双璧、とふたりは共通点が多く、何事に於いても比較された。以降も＜宿命のライバル＞として切磋琢磨していくことになる。

1975年、ポップス演歌「哀恋記」は軽いアクションが話題になる。

桜の季節にあわせてリリースされた初の＜音頭＞もの「さくら音頭」は和服姿で披露。後年、「ひろしのさくら音頭」と改題。

この年の勝負作となる＜旅情演歌＞「千曲川」はもともと猪俣公章が春日はるみ（現在の川中美幸）の不振を打開するために用意した作品で、すでに星野哲郎によって題（「笛吹川夜曲」）も詞もでき上がっていた。しかし、山口洋子が五木の「NHK紅白歌合戦での初トリと2度目の日本レコード大賞獲り」を願って、猪俣からこの曲を譲り受け、改題の上、敢えて長野県戸倉（歌碑が建立されている）には赴かずに東京に居ながら現地のことを想って詞を練り直した。その際、演歌にありがちな愛や色恋や情の部分を廃した。これらが功を奏し大ヒット。五木の代表作のひとつに数えられる。

＜初の本格演歌＞と宣伝された猪俣作品第2弾「ふたりの旅路」はジャケット（歌詞カード）の他に、山口洋子らの挨拶文を収めた小カードが挿入されるほどの力の入れようであった。

第4回東京音楽祭国内大会では「千曲川」でゴールデン・カナリー賞を連続受賞し、同世界大会へも連続出場。第6回日本歌謡大賞では「千曲川」で放送音楽賞を受賞。第17回日本レコード大賞では「千曲川」で歌唱賞、そして第17回日本レコード大賞最優秀歌唱賞を受賞。

1976年、猪俣作品第3弾となる軽快な「愛の始発」がヒット。

しかしこの年の勝負作として投入された「北酒場」は、大ヒットした森進一「襟裳岬」に触発された形で五木が初めて取り組んだ＜フォーク＞作品であったが、期待されたほど大きな成果を上げることはできず。

＜テレビ・コマーシャル最後の大物＞と云われて久しかったが、終にテレビ・コマーシャルに初出演。スポンサー「味の素」と契約を交わす。

「旅人」はヒットさせることを目指した作品ではなく、コマーシャル(C.M.)・ソングとしてリリースされたものであることからテレビ歌謡番組等では積極的に披露してはいない。

つづく「どこへ帰る」で久々に平尾作品に回帰。

アメリカ合衆国ネバダ州ラスベガスでのコンサートを、当地のヒルトンホテルにて興行（日本人歌手としては初めて）。

まだあまり注目を集めていないが、アラフォー、アラヒーフなど、この世代の女性歌手たちが、知らぬ間にとってもいい仕事をしている。他に、島津悦子、岡ゆう子、北見恭子、三代沙也可など。それぞれ3、4の佳曲を出している。じっくりでいい、いつか大きなスポットを当てて欲しいものだ。さて、この曲は、基調のルンバが軽快に流れ、そこに別れのほのかな哀愁が乗る。そのままだでも、社交ダンスに使える仕様になっている。演歌のように、ドロドロを追求しない点が現代的。出だしからの、圧倒的な親ヨーロッパ、やるせなく品のある曲調、美しくはかない別れのイメージ。真木は、女優もやるというだけあって、見栄えのする容姿で華やかだ。

(詞 仁井谷俊也 曲 市川 昭介)

硝子の都会を 染める夕暮れ 髪をなでる風にさえも 貴方感じるの 恋はいつでも映画のようね 心燃やす接吻-----

(収集プロフィール)

真木 柚布子 (まき ゆうこ、19xx~) 北海道美唄市出身の歌手、俳優。劇団四季研究所を卒業し、映画や舞台、TVドラマなどで女優としても活躍する。

*「別離の雨」 しっかりと感情を込めながらもさりげなく歌い上げる女心は、別れていった相手を想い続ける、淋しくも可愛く綴った内容。真木柚布子の重ねたキャリアから醸し出される雰囲気がかい。あきらめきれない思いを、明るいメロディに乗せたナンバーで、女の情念を歌いながらも、不思議と癒される作品となっている。

*「ふられ上手」軽いタッチのアレンジで、主人公の泣き笑いの心情を唄う真木の歌唱を巧く引き立てている。カラオケで受けそうな佳曲。「紅吹雪」は一転、女の情念を前面に押し出した楽曲だが、彼女はほどのよい重さと暗さに止めた唄い方で逆に聴き手の心を引き寄せる効果を上げた。ノスタルジックで軽快なメロディが心を酔わす！

60年代のノスタルジーなメロディーを歌謡曲に作り上げた作品。50~60代には、とても懐かしさを感じ、内容的にはふられてもサッパリとした粋な女性を描きます。

*砂の城 歌って踊れるダンス・ミュージック。「大阪マンボ・黄昏のルンバ・渚のビギン」と歌って踊れるリズム歌謡でひとつのジャンルを築いた真木。今回はより歌い易さと、心地よい踊りの出来るダンス・カラオケに。波と風に崩れてゆく〔砂の城〕のように、はかなく愛の終着を迎えた女の淋しさを唄っている。いわゆるリズム歌謡。マイナー調ながらリズムカルな演奏を背景に。イントロと、歌い出しから1フレーズごとに付けた全休符で楽器を弾ませ、直後に♪でも、でも、でも~、で~も~、と刻む譜割がニクイ。ワルツ、ツイストと共に歌謡曲でよく使われるルンバが今作の基本リズムで、ラテンの乗りが、悲しくもオシャレな曲想を醸し出す。歌謡曲に使うルンバは、ダンスではスクエア(ボックス)ルンバの方を指す。

*『大阪ドドンパ』、『星空のタンゴ』、そして『酒とバラ』はマンボだった。彼女は、元々、劇団四季やポップス歌手の経験があって演歌に転向した。

主な曲

平成1年11月「いのち花」平成2年度新宿音楽祭銅賞

- 6年 「月夜船」
「雪の華」
- 7 「えにし川」 キング移籍第一弾
- 8 「海峡かもめ」
- 10 「大阪マンボ」
「冬桜」
- 11 「大阪ドドンパ」
- 14 「黄昏のルンバ」
「星空のタンゴ」
- 18 「下北半島」
- 19 「越中恋歌」
「奥入瀬川」
- 20 「酒とバラ」
「別離の雨」
- 21 「砂の城」
「ふられ上手」
- 22 「夢追い舟唄」

去年まで、ほとんど知らなかった方々だが、私がネオ・ルネッサンス50として取り上げているアーティストの方々。皆、それぞれにとってもいい仕事をしている。真木は、そのなかでも、最有力のひとりだろう。尊敬する人として、美空ひばりを挙げているが、真木の業績も幅広いものになっている。純粹演歌から、ハワイアン、すぐに社交ダンスに使える曲まで。主声は柔らかな美声で、演歌系の曲も、とても上手いが、この分野は競争（しかも強豪、名馬ぞろい）が激烈。とりあえず、競争のやや少なめな、歌謡ポップスで、いい曲を出していくのが賢明だろう。

（詞 上田紅葉 曲 花岡優平）

赤いルージュを吐息で濡らし ひとり飲む酒 苦い酒 来ない誰かを 待ち侘びるより 水に流して さよなら-----

（収録プロフィール）

真木柚布子（まき ゆうこ、19XX～）北海道美唄市出身の歌手。

*歌って踊れるダンスミュージック。「大阪マンボ・黄昏のルンバ・渚のビギン」と歌って踊れるリズム歌謡でひとつのジャンルを築いた、真木柚布子。

シングル（Aは名曲）

平成1年11月「いのち花」平成2年度新宿音楽祭銅賞

7年 「あんた」

「別れのルンバ」2枚同時発売

10 「大阪マンボ」

12 「冬桜」

14 A「黄昏のルンバ」

「星空のタンゴ」

15 「高瀬川」

17 「渚のビギン」

19 「越中恋歌」

20 A「酒とバラ」

「別離の雨」

21 A「砂の城」

A「ふられ上手」

22 「夢追い舟唄」

演歌なのだが、リズムは現代のものだ。台詞のような前フリと、リズムカルな、中心の部分。詞の林あまりの作り出す、現代的なシュチュエーションも、斬新な感覚でいい。

いつまで待っても来ぬ人と 死んだ人とは 同じこと---弥生の空に さくらさくら 花吹雪---日本人の感性に、いちばん合う桜。青空にも、月夜にも、ぴたりと合う。内容的には、古典的な歌舞伎のような世界と、現代の感覚が、みごとに融合している。そして、坂本の、素直で巧みな歌唱も、大きな力になっている。

(収集プロフィール)

坂本 冬美（さかもと ふゆみ、1967年3月～ ）は、和歌山県出身の演歌歌手。

NHKの「勝ち抜き歌謡天国」（和歌山大会）で名人となり、審査員だった猪俣公章の内弟子となる。1987年に『あばれ太鼓』でデビュー。初期は『あばれ太鼓』『男の情話』など男歌を歌うことが多かった。

1991年に細野晴臣、忌野清志郎とHISを結成。アルバム「日本人」発売。なお、2005年にNHKラジオ第1「旅するラジオ こんにちは!80ちゃんです」テーマ曲『Oh, My Love』も当初HISのユニットで発売予定だったが坂本冬美個人名での発売となった。

主なヒット曲

あばれ太鼓（作詞：たかたかし、作曲：猪俣公章）

祝い酒（作詞：たかたかし、作曲：猪俣公章）

男の情話（作詞：松井由利夫、作曲：猪俣公章）

能登はいらんかいね（作詞：岸本克巳、作曲：猪俣公章）

火の国の女（作詞：たかたかし、作曲：猪俣公章）

夜桜お七（作詞：林あまり、作曲：三木たかし）

大志〔こころざし〕（作詞：たかたかし、作曲：市川昭介）

凜として（作詞：たかたかし、作曲：徳久広司）

Oh, My Love~ラジオから愛のうた~（作詞：忌野清志郎、作曲：細野晴臣）

女優として

1994年に 遠山金志郎美容室（日本テレビ）にてドラマ初出演。

2004年にはTBSテレビ特番「ラブジャッジ2」に出演。坂本はホストクラブのオーナーママの役で、主演する泉ピン子（弁護士とホストクラブのオーナーママを兼業）との熾烈なライバル関係を描いている。

テイチクに移籍してから、中ヒットながら、いい曲が続いている。花も嵐も、おまえにありがとう（作詞：たかたかし・作曲：弦哲也）しあわせの青い鳥、など。どれも気を晴らし、音楽的にも、水準を超える佳曲である。特にこの曲は、優しく柔らかく、心を癒す力を持っている。

最新曲の「泣いたらいいさ」すこし瘦せたのか... 雨のせいなのか、も、戦前や昭和40年前後の、名曲のテイストをうまく取り入れて、モダンで素敵な、霧の降るような、大人の曲になっている。

おまえの涙が 雨になり 俺の行く手に 降り---やすらぎやれぬ その女を ひとり旅路で 想い酒---

（収集プロフィール）

山本 譲二（やまもと じょうじ、1950～ ）、は山口県出身の歌手である。「琴五郎」名義で、楽曲の作詞・作曲も行っている。

サブちゃん率いる演歌集団“北島ファミリー”の若頭、山本譲二。24才で歌手デビューを果たすが、長い下積みを経験する。しかし、北島三郎(通称オヤジ)に入門し、78年「北ものがたり」で再デビュー。そして「みちのくひとり旅」(81年)が、念願の大ヒットを記録する。新宿での流しから始まり苦節10年、まさに叩き上げの演歌人生だ。

山本の出身は本州最南端・下関なのだが、「みちのくひとり旅」を筆頭に、「奥州路」「奥入瀬」と、もち歌には東北をテーマにしたものが多い。やはり暖かい南よりも自然の厳しさを感じさせる地方を舞台にしたほうが、山本特有の切ない男心を噛みしめるような演歌には、ピッタシはまりやすいのだろう。すぎる女を振り切って、行かなきゃならない男。こういうシチュエーションを歌わせたら右に出る者がいない。

最近では、木梨憲武(とんねるず)とのデュオ、憲三郎&ジョージ山本で「浪漫～ROMAN」(96年)をヒットさせるなど若年令層にもその存在をアピール。

甲子園に出場

早稲高校時代の1967年、夏の甲子園出場。松商学園（長野）に敗れるも代打出場ながらヒット（内野安打）を打つ。

不遇の下積み時代

演歌歌手になりたくて上京。多くの職を転々とする。クラブのボーイ時代、お客の飲み残しのビールを飲み干す。中にはタバコの吸い殻がたくさん入っていた。肝臓を壊しやむなく帰郷、ひっそりと療養生活を送る。母親の叱咤で強い決意を持ち22歳で再び上京。再び職を変えながらスナックでギターを手に2年間弾き語り続ける。たまたま店に来た浜圭介に誘われ芸能界入りした。当初は映画「ダーティハリー」にかけて、「伊達春樹」という芸名でデビューしたが、パツとせず、崖っぷちに立たされた。

北島三郎との出会い

最後の決意で北島三郎の仕事場に何度も足を運び頭を下げ、十数回繰り返したときに北島から突然、鞆(かばん)を渡された。即ち「鞆持ちになれ」という意味であり、以降2年間北島の付き人

を務める。25歳だった。これを契機に1976年、ytv'の歌謡オーディション番組「全日本歌謡選手権」（司会・長沢純）に出場、「おもいで岬」や「中の島ブルース」などを歌って見事10週勝ち抜いた。「山本譲二」名義でポニーキャニオンから再デビュー。またも鳴かず飛ばずが続く。

ひとり旅で大ヒット

30歳の時に『みちのくひとり旅』をリリース。北島等からは「この曲でダメ（売れない）なら、（歌手を）諦めろ」と言われていたと言う。しかしこの曲も売れず大ヒットには更に10ヶ月を要した。年を越し1年近くが経過。「夜のヒットスタジオ」に注目曲として出演すると大きな反響を呼び大ヒット、31歳の時だった。こうした経緯から北島を親父と慕い、現在は北島ファミリーの旗頭的存在である。代表的な歌曲に『みちのくひとり旅』、『旅の終りはお前』、『花も嵐も』など。

なお、『みちのくひとり旅』がヒットしていた頃、あるテレビ番組の企画で無人の甲子園球場のマウンドでこの曲を独唱したことがある。

テイチクへ移籍

平成に入ると演歌が急速に衰退、1999年には所属していたポニーキャニオンが演歌・歌謡曲部門の廃止を決定。このためテイチクへ移籍、2000年には移籍第1弾シングル「花も嵐も」を発売。

社会人野球

また2005年、山口県に社会人野球のクラブチームを設立する計画を表明。チーム名は「山口きららマウントG」で、自ら総監督に就任。また池永正明を監督として招聘したため話題性もあり高い注目を集めている。

事務所から独立

2007年1月1日から北島音楽事務所を独立して個人事務所ジョージ・プロモーションを立ち上げた。暖簾分けという形であり、今も北島音楽事務所とは業務提携という形で強いつながりを持つ。

代表曲

みちのくひとり旅（詞：市場馨 曲：三島大輔）

旅の終りはお前（詞：市場馨 曲：三島大輔）

からたちのふるさと（詞：市場馨 曲：杉本直人）

ごめんよ（作詞：山田孝雄、作曲：浜圭介）

湘南哀歌（作詞：阿久悠、作曲：宇崎竜童）

奥州路（作詞：石原信一、作曲：三島大輔）

夕陽（作詞：荒木とよひさ、作曲：平尾昌晃）

北情歌（作詞：山田孝雄、作曲：幸耕平）

男詩（作詞：阿久悠、作曲：円広志）

望郷しぐれ（作詞：水木れいじ、作曲：円広志）

夜叉のように（作詞：阿久悠、作曲：幸耕平）

えくぼ（作詞：星野哲郎、作曲：原譲二）

時は流れても（作詞：吉岡治、作曲：岡千秋）

ひとりで泣くなよ（作詞：さいとう大三、作曲：馬飼野俊一）

奥入瀬（作詞：北山文化、作曲：桜庭伸幸）

星空の鎮魂歌（レクイエム）ー津田恒実投手に捧ぐー（作詞：丹古晴巳、作曲：山本譲二）

海鳴り（作詞：吉田旺、作曲：三島大輔）

長州の男（作詞：星野哲郎、作曲：原譲二）

きらめく風の中で（作詞：松本礼児、作曲：山本譲二）

...夢・想・人...MUSOUJIN（作詞：北山文化、作曲：武野良）

七夕月【萩の花咲く頃】（作詞：星野哲郎、作曲：三島大輔）

花染められて（作詞：麻ごよみ、作曲：美樹克彦）

関門海峡（作詞・作曲：琴五郎）

竹とんぼ（作詞・作曲：横山聖仁郎）

夢街道（作詞・作曲：琴五郎、補作詞：原譲二）

外は雨が...（作詞：大津あきら、作曲：浜圭介）

俺がいるじゃないか（作詞：建石一、作曲：徳久広司）

放浪う...ままだ（作詞：田久保真見、作曲：浜圭介）

棒の哀しみ（作詞：藤波研介、作曲：大野弘也・映画「棒の哀しみ」の主題歌）

花も嵐も（作詞：たかたかし、作曲：弦哲也）

おまえにありがとう（作詞：たかたかし、作曲：弦哲也）

しあわせの青い鳥（作詞：たかたかし、作曲：弦哲也）

都会の子守歌（作詞：たかたかし、作曲：弦哲也）

おまえと生きる（作詞：悠木圭子、作曲：鈴木淳）

生きる（作詞：星野哲郎、作曲：原譲二）

放浪～さすらい～（詞：たかたかし 曲：弦哲也）

ふるさとのなをしよう（作詞：伊野上のぼる、作曲：キダ・タロー）※オリジナルは北原謙二

倅せあげたい（作詞：仁井谷俊也、作曲：弦哲也）

名もない花に乾杯を（作詞：城岡れい、作曲：弦哲也）

風鈴（作詞・作曲：津島一郎）

新宿の月（作詞：城岡れい、作曲：弦哲也）

高杉晋作（作詞・作曲：津島一郎）

惚れたおまえと（作詞：たかたかし 曲：弦哲也）

泣いたらいいさ（詞：城岡れい 曲：弦哲也）

浪漫-ROMAN-【とんねるずの木梨憲武とデュエット（「憲三郎&ジョージ山本」として）】（作詞・作曲：原譲二）

泣いたらいいさ（詞:城岡れい 曲:弦哲也）

テレビ番組

暴れん坊将軍

サブちゃんと歌仲間

熱血テレビ（山口放送） - まだヒットに恵まれない頃、この番組の司会者・井上雪彦アナウンサーが司会をしていた同局のラジオ番組に出演し、応援してもらった縁で、番組開始とともに準レギュラーとして時々出演していた。井上アナが急死した際は仕事のため葬儀等に参列することができず、番組にコメントを寄せた。

コミックソングではあるが、楽しく、そして十分な哀愁もある。この系の作品で、珍しい成功作である。麻布は、何度か通ったことがあるが、洒落た男女の、別れの場に相応しい、世の中の見えない漣が、押し寄せるような街である。人には、いつか別れがくるのだが、この街の別れは、素敵な思い出になっていくような気がする。

(詞：秋元康 曲：見岳章)

だから女は俯いて だから男は無口になった 馬鹿な---愛の出口 つのる想い 雨の---

(収録プロフィール)

とんねるずは、石橋貴明と木梨憲武の2人からなるお笑いコンビ。

メンバー

石橋貴明 (いしばしたかあき、1961～) 東京都板橋区成増出身

木梨憲武 (きなしのりたけ、1962～) 東京都世田谷区千歳台出身

*コンビ芸人だがとんねるずは、ボケとつっこみの役割が特に分れていないスタイルである。デビュー当時のプロフィールにはそんな自分たちの存在を“カリスマ芸人”と記載していた。とんねるずは現在の若手お笑い芸人における、特定の師匠を持たないお笑い芸人の草分け的存在である。

ここまで何でもこなされちゃうと、他の芸人はまいっちゃうんじゃないだろうか。石橋貴明と木梨憲武のふたりは、82年あたりからテレビやラジオでその頭角を現しはじめ、歌手としても84年に「一気!」で正式デビュー。その後も、「雨の西麻布」「嵐のマッチョマン」「炎のエスカルゴ」「情けねえ」など演歌風バラードからラテン歌謡曲まで数々のヒットを世に送り出し、『夕焼けにやんにやん』や『ねるとん紅鯨団』といった人気番組で活躍する。また、98年には『みなさんのおかげでした』(フジテレビ系)から飛び出した番組スタッフとの混合ユニット「野猿」での活動を開始、ヒップ・ホップやR&Bといった時代が求めるサウンドに手を伸ばした。

プロフィール

共に、帝京高等学校を卒業。在学中、石橋は野球部、木梨はサッカー部に所属。石橋は高校在学中から「ぎんざNOW!」や「TVジョッキー」をはじめとした、素人参加番組の常連であり、アントニオ猪木のモノマネやスポーツ選手の形態模写をはじめとする芸。

帝京高校卒業後、2人は一般企業(石橋はホテルセンチュリーハイアット、木梨はダイハツ)に就職するものの、「お笑いスター誕生」へのチャレンジ決意を機に再会。漫才ではなく、モノマネや一発ギャグ、学校やアイドルタレントの一コマを演じるコント等面白いものは何でもエネルギーに演る多彩さで、素人ながら5週目まで勝ち抜く(当時のコンビ名は「貴明&憲武」)。それを契機に2人は退社、1980年に正式にコンビ結成。コンビ名も「とんねるず」と改め「お笑いスター誕生」にプロとして再挑戦して挑むが、惜しくも10週目で落選してしまう。

周囲の環境も整え、エネルギーも十分に蓄えたとんねるずは1983年、深夜の人気番組「オールナイトフジ」を皮切りにテレビ復帰。

芸風

とんねるずのトークの中にはその時代の流行を反映した言葉が多く用いられている。例えば「○○みたいな〜?」と語尾に付ける言葉は若者中心に使われているが、これは主に東京近郊の女子大生が使う言葉を敢えてとんねるずがTVで誇張して用いることで、全国的に広まった。他にも「ねるとん紅鯨団」から端を発した「ねるとんパーティ」「ツーショット」、「ねる様の踏み絵」で使われた「元サヤ」など、彼らが発信元となった言葉は数多い。また、今では普通に使われる「○○系」「○○状態」も彼らが発信源である。

元祖アイドル呼び捨て芸人

これは旧世代の芸人/漫才師の在り方に由来する。彼らの仕事は演歌歌手の前座が多く、正月の隠し芸大会等でもあくまで歌手や人気アイドルを引き立てる幫間であり、“歌手のおかげで食べさせてもらえる”意識が強かった時代の名残である。これを侵せば業界から抹殺されかねないほどの約束事とも言え、対スポーツ選手でも同様であった。

この状況の変化は、ビートたけしの登場から始まっている。大学生活を経験したという意味で芸人としては異色の存在であったビートたけしは、歌手やアイドルが実は間抜けで頭が悪いという面をどんどんネタにすることと、本格的な哲学をも怖じずに知的に語る活躍によって、お笑いタレントの地位を徐々に上げていった。

秋元康との出逢い

彼らの筆頭ブレーンとして番組構成や作詞をはじめとしたイメージ戦略に携る事となった。

下克上タレント

とんねるずに関しての初期文献広告批評とんねるず特集では、彼らを“下克上タレント”と評している。芸人間では通常上下関係に関しては非常に厳しいが、とんねるずは“生意気”“成り上がり”“下克上”など媚びぬことをスタンスに定めている部分がある。

夜のヒットスタジオで

名物コーナー・オープニングメドレーではヒッピー風、羽織袴姿などといった怒髪天な衣装で登場し、敢て音程を全て外して次に登場する歌手の持ち歌を歌ったり、DJ風のアナウンスで次の歌手の紹介を行う。しかし、前述でも随所に触れられている彼らの本質ともいえる、その裏での「体育会」系の対応が功を奏す。

1987年10月、マンスリーゲストとして出演していた久保田利伸に某演歌歌手が後ろから何度も蹴りを入れているのを見兼ねた石橋・木梨の二人は、久保田を庇ってすかさず仲裁に入り、事態は収束した。久保田は以降、とんねるずの二人に対し深い恩義を感じ、親交を持つようになった。

音楽活動

デビュー曲はアニメ『新・ど根性ガエル』の主題歌「ピョン吉・ロックンロール」。その後も「一気!」「雨の西麻布」など、音楽活動開始当初はどこかコミックソングを思わせるような曲を歌っていた。

「初登場2位→翌週ランク外」がほとんどだったシングル売り上げが、「情けねえ」では数ヶ月の間オリコンチャートの上位に位置するロングヒットを記録。紅白歌合戦に初出場し、パンツ1丁で出演して「受信料を払おう」というペインティングをして話題をさらった。

「雨の西麻布」＝「男と女のラブゲーム」日野美歌 & 葵司郎

「人情岬」＝「岬めぐり」山本コータローとウイークエンド

「嵐のマッチョマン」＝「ハロー・ミスター・モンキー」アラベスク

「迷惑でしょうが...」＝「前略おふくろ様」他 萩原健一（歌詞に“ぐでんぐでん”など萩原健一曲のキーワードが複数出る。全体のテイストは前略おふくろ様）

「おらおら」＝「ぐでんぐでん」萩原健一

「炎のエスカルゴ」＝「コパカパーナ」バリー・マニロウ

「情けねえ」＝「ろくなもんじゃねえ」長渕剛

「歌謡曲」＝「チャコの海岸物語」サザンオールスターズ

以上等原曲の特徴やサビ等がそのままあしらわれてアレンジされている。ポイントはとんねるずの世代背景を踏襲していることで、彼らの支持層の若者はこれらの楽曲を知らずに素直に評価する。またとんねるずと同世代か上の世代はこれを聴いて「ニヤリ」とする。この方法論は近年つくくがモーニング娘のプロデュースで踏襲している。過去にヒットした曲のエッセンスを採り入れれば曲の成功率は高まる理屈である。

シングル

ピョン吉・ロックンロール（1981）

ヤバシびっちな女(め)デイト・ナイト（1982）

一気!（1984- ビクターに移籍）

青年の主張（1985）

雨の西麻布（1985）

全日本有線大賞最優秀新人賞

第23回（1985）ゴールデン・アロー賞芸能新人賞

自身初の「ザ・トップテン」での1位

歌謡曲（1986）

テレビ東京メガロポリス歌謡祭特別賞

やぶさかでない（1986- キャニオンレコードに移籍）

寝た子も起きる子守唄（1986）

人情岬（1986）

嵐のマッチョマン（1987）

日清やきそばUFO CMソング

迷惑でしょうが...（1987）

アルバム「キャニオン初」からのシングルカット。

大きなお世話サマー（1987）

おらおら（1987）

炎のエスカルゴ（1988）日清やきそばUFO CMソング

YAZAWA（1988）

どうにかなるさ（1990）

情けねえ（1991）第22回日本歌謡大賞(大賞受賞)

ガラガラヘビがやってくる (1992) 自身初のオリコン1位、ミリオンセラー
一番偉い人へ (1992)
おまえが欲しい (1996)
アルバム
成増 (1985年)
仏滅そだち (1985年)
河口湖 (1987年)
悪い噂 (1993年)
Arrival (1994年)
おまえ百までわしゃ九十九まで (1995年)

この30年間に発表された、演歌・歌謡曲系のなかで、ベスト5にはいる名曲である。ちなみに、はぐれそう、と読む。ストーリーが、切なく物悲しいが、甘美で、淋しさにリアリティーがある。香西の歌唱力も、フルに発揮され、素晴らしい出来あがりになっている。この唄ほどの、一般性はないが、同じ香西の「宇治川哀歌」も、世のはかなさを、甘美に歌い上げて、素晴らしい。

恋人に去られて、つらい日々を送っている、ヒロイン。自己を哀れみ、絶望を味わい、いま、なにかさがるものを求めている彼女。それは、たとえ失恋でなく、人に裏切られたり、仕事がうまくゆかなくて、悩んでいたりと、といったシチュエーションにも、敷衍できる。また、置き換えることができる。そして、この曲を味わうことによって、癒しをえることができる。わずか、3分の癒しであっても、好きなだけ、繰り返し聞くことができる。そして、すこしずつ、すこしずつ、心の傷が、癒されていくのだ。

(詞 里村 龍一 曲 聖川 湧)

雨の小路に 散る花に この世のはかなさ---ひとつ拾って 手にのせりゃ 悲しみが こぼれま
す ああ---

(収集プロフィール)

香西かおり(こうざい かおり、1963~)は日本の歌手。大阪市港区出身。大阪市立東商業高校卒。

主な曲(Aは名曲・他は佳曲)

A雨酒場(1988年5月)

第30回日本レコード大賞新人賞

A流恋草(1991)

日本有線大賞

花挽歌(1992)

A無言坂(1993)

第35回日本レコード大賞

恋慕川(1994)

A宇治川哀歌(1996)

すき(1997)

雨降橋(1997)

A浮雲(1998)

A望郷十年(1999)

居酒屋「敦賀」(2005)

最北航路(2006)

女の帰郷 (2009)

春陽炎 (2010)

この20年、坂本冬美と並んで、私の最も注目する歌手である。総合力では、坂本優位は否めないが、歌唱力は、持ち味は異なるが互角であろう。美空ひばりが天に召され、島倉千代子と都はるみ、水前寺清子、八代亜紀が別格化した現在、二人は石川さゆり・天童よしみの次に位置する。またポップスと演歌を繋ぐ歌手としても期待され、応える力量は十二分にある歌手でもある。この面では、声質の有利さで、坂本よりも優位であろう。ただし、香西のこの4、5年の作品は、いまいちの曲が多い。リリースを減らして、時間をじっくりかけて、名曲を生み出す作業と根気が必要であろう。名曲「流恋草」のような一般性はないが、「宇治川哀歌」は、香西の哀切な歌唱と、人の世のはかなさを謳う品のいい曲とが、見事にマッチして、深い感動を呼び起こす。

(作詞：秋浩二 / 作曲：杉本真人)

遣り水さらさら蛍が飛び交う 闇を走ってあなたに---話しかけてもきっとあなたは 何も変わらない 白い単衣の帯紐しめて 明朝はたちます 霧の中----

(収集プロフィール)

香西かおり (こうざい かおり、1963年8月-) は日本の歌手。大阪府出身。大阪市立東商業高校卒業。

*さりりとした味の演歌ヴォーカルを聴かせるのが香西だ。竹内まりやの「シングル・アゲイン」をカバーし、何とも微妙な歌唱で、本当に演歌をうたいたいのだろうか?と思わせたりもする演歌新世代ならではのアクといったものを感じさせない。

*「香西かおり 私旋律」里村龍一&聖川涌コンビによる詞曲を歌ってきた香西かおりの全曲集は、中庸感覚の演歌であり、かおりの歌声は詞の内容ほど男にすぎることなく、逆に当世娘を反映してか、程々に自立しているように聴こえる。歌との距離を保った歌声だ。

*薄幸の女を予感させるさびしげな歌声が香西かおりの演歌の基本形をつくっている。決して力むことなく、普通を装っていても肩がさびしげであったりするポーズをとる歌声が魅力。内気とか強気とかとは違う、なぜか男とはぐれてしまう女を演じる。

*若手正統派演歌歌手としてはピカイチの存在となった。好き嫌いは別として、演歌だなあと素直に認めてしまえる歌手は案外いない。アレンジも臭くならず素直。

*CMで話題を呼んだ「恋の奴隷」などを含むベスト。幅広い選曲だが女心を切々と訴える表現はさすが、スケール感も出てきた。伝統的な演歌ばかりではなく、都会的なしゃれたサウンドも身に付けたようだ。

*哀しい世界をうたっても、この人の歌声には何処かに救いがある。決してドライなイメージではないが、割り切り方のうまさとも言えいいのだろうか。気っぷのよさが歌にも表われているようだ。多方面への広がりを感じさせる歌手。

*「綴織百景VOL.6」美空ひばりを唄う歌手は、ひばりの歌唱と声に近づこうとしていることが多い。香西は歌唱ではなく、楽曲の良さを自分なりに解釈し、ジャズ歌手がスタンダード曲に挑むように、本来の意味でカバー。

*「ベスト・セレクション」全15曲とも、かなわぬ恋、せつない恋、つらい恋などに身をやつしながら健気に耐える女心がテーマで、初期のヒット曲「恋舟」「流恋草」も収録。香西は、この世の不幸を一身に背負い、悲恋の主人公になりきっている。

*全体的にしっとりとした歌声と叙情的な演奏がマッチし、情感あふれる楽曲を揃えている。「浮雲」は、恋の未練に心寒く身も細る女の歌だが、どこか傍観者的な雰囲気は漂ういかにも香西らしい仕上がり。

*押しどころと退きどころの兼ね合いが絶妙。香西の唄は、シットリと絡みつくようでいながら決して濃味ではないところに、その味わいがある。曲調はド演歌なのにそこはかたなくポップス系の香りがして、そのあたりが香西味の秘密。

*おとことおんなをテーマにした熱爛風情の正統派ソング。デビュー曲「雨酒場」でレコード大賞新人賞を獲得、“演歌の花道”を歩き出す。その後も「流恋草」「花晩夏」など、ストロング・スタイルな魅力を宿した楽曲を次々と発表し、絶大なる支持を獲得していった。港酒場、カラオケ、小料理屋、スナック、長距離トラックの車中、など今夜も、かおりの艶やかな歌声が日本全国各地でこだまする。

シングル

雨酒場（1988年5月）

恋舟（1990）

流恋草（1991） 日本有線大賞受賞

花挽歌（1992）

恋紅葉（1992）

無言坂（1993） 第35回日本レコード大賞受賞

恋慕川（1994）

越前恋歌（1994）

ごむたいな（1995）

宇治川哀歌（1996）

すき（1997）

雨降橋（1997）

人形（1997年9月26日）

母から母へ（1998）

浮雲（1998）

望郷十年（1999）

恋草紙（2000）

浮寝草（2000）

楽しい人が好き（2001）

あなたへ（2002） 村下孝蔵の遺作

氷雪の海（2002）

潮岬情話（2003）

人生やじろべえ (2004)

白い雪 (2004)

居酒屋「敦賀」 (2005)

最北航路 (2006)

き・ず・な (2007)

秋田ポンポン節 (2007)

風恋歌 (2008)

この所、最大のライバルである坂本冬美に、差を広げられている。頑張っただけなのだが、この世界では、曲に恵まれない限り追いつくことは出来ない。残念ながら「望郷十年」以降の曲は、いまいちピンとこない。まあ、あせらずに、次のチャンスを待つしかないが。名曲だが「雨酒場」は中ヒットだったので、「無言坂」は、初めてのビッグヒットとなる。当時、人が普段、感覚として持ちながら、表現しにくい部分を唄にしてくれた、といった感じを受けながら、聴いていた。新鮮な感覚と、新鮮な曲調が、都会的。

(久世光彦(市川睦月)詞 玉置浩二 曲)

あの窓も この窓も 灯がともり 暖かな しあわせが みえる 一つずつ 積み上げた 積もりでも いつだって すれ違う 二人 こんな つらい恋 口に出したら 嘘になる 帰りたい---

(収録プロフィール)

香西かおり(こうざい かおり、1963年8月-)は日本の歌手。大阪市港区出身。大阪市立東商業高等学校卒業。

経歴

幼い頃から民謡で各種の賞を受賞、「香西香」名義で民謡のレコードも発売。

1982年、太陽神戸銀行(現・三井住友)に入行。しかし、歌への想いが募り退行。歌手になるため上京し、1988年に演歌歌手としてデビュー。

1993年、「無言坂」がオリコンチャートで10位を記録、同曲で第35回日本レコード大賞を受賞。演歌歌手としての認知度が高いが、ポップスから民謡、歌謡曲まで幅広くこなす。

私生活では2000年4月、ミュージシャンの男性と結婚、2002年2月に離婚。

*おとことおんなをテーマにした、熱爛風情の正統演歌が得意。88年のデビュー曲「雨酒場」でレコード大賞新人賞を獲得、「演歌の花道」を歩き出す。その後も「流恋草」「花晩夏」など、ストロング・スタイルな魅力を宿した楽曲を次々と発表し、絶大なる支持を獲得。

主な曲

雨酒場(1988年5月)

流恋草(1991)

無言坂(1993)

宇治川哀歌(1996)

浮雲(1998)

望郷十年(1999)

女の帰郷(2009)

春陽炎

すでに6つの名曲と「くちなしの悲歌」など10以上の佳曲を持つ、大歌手である。最新の「春陽炎」は、名曲までにいま一步だが、ここ10年のなかでは断然、佳曲といえるだろう。事情は、色々あるのだろうが、??というような曲が多かったのだ。凡庸な歌手になら提言しないが、??というような曲は、もう発表しないほうがいい。それだけでなくともライバルの坂本冬美に、この所徐々に差をつけられているのだから。素晴らしい力があるだけに、惜しいのだ。名曲を生み出すことに、専念して欲しい。

(詞・悠木圭子 曲・鈴木 淳)

湯ぶねに からだを沈めても 心はさむく身は細る---ぬくもり探す 胸もない わたしは浮雲---

(収集プロフィール)

香西かおり (こうざい かおり、1963年8月-) は日本の歌手。大阪市港区出身。大阪市立東商業高校卒。

主な曲 (Aは名曲・他は佳曲)

A雨酒場 (1988年5月)

第30回日本レコード大賞新人賞

A流恋草 (1991)

日本有線大賞

花挽歌 (1992)

A無言坂 (1993)

第35回日本レコード大賞

恋慕川 (1994)

A宇治川哀歌 (1996)

すき (1997)

雨降橋 (1997)

A浮雲 (1998)

A望郷十年 (1999)

居酒屋「敦賀」 (2005)

最北航路 (2006)

女の帰郷 (2009)

春陽炎 (2010)

歌手としては、その実力は、坂本冬美と双璧と言っていいだろう。坂本は、ヴァラエティや女優、司会も器用にこなすので、総合力は、いまのところ坂本に分があるが。

中ヒットしたこの曲は、従来の路線に乗った、安心して心を癒してくれる演歌である。ただし、メロディーには美しいストリングスが隠され、サブ・サウンドにも、目立たないでいどに現代性が感じられる。このような新しさが、香西かおりの強みであろう。

(詞・里村龍一 曲・聖川湧)

遠い夕陽に哭く木枯らしが 胸であなたの呼ぶ声になる---夜行列車の灯りの帯が 北へ流れる蛍に見える 逢いたさ十年 冬空夜空---

(収集プロフィール)

香西かおり(こうざい かおり、1963-)は演歌歌手。大阪府出身。大阪市立東商業高等学校卒業。

経歴

小さい頃から民謡で各種の賞を受賞。

1982年、太陽神戸銀行(現・三井住友銀行)に入行。しかし、演歌への想いが募り、退行。歌手になるため上京した。

歌手デビューは1988年。

一般的には演歌歌手としての認知度が高いが、ポップスから民謡、歌謡曲までと幅広く歌える歌手である。またポップス歌謡をシングルとして発売するときは、着物姿でなく洋服姿でジャケット写真を撮り、香西本人の作詞による発表のことが多い。着物服よりも洋服姿のイメージが強い。

2003年、宗教家の松井昌雄とのデュエット曲を発表。大きな話題となった。

*おとことおんなをテーマにした熱爛風情の正統派ソングを得意としている。

88年のデビュー曲「雨酒場」でレコード大賞新人賞を獲得、「演歌の花道」を歩き出す。その後も「流恋草」「花晩夏」など、ストロング・スタイルな魅力を宿した楽曲を次々と発表し、絶大なる支持を獲得していった。港、酒場、カラオケ小料理屋、スナック、長距離トラックの車中---今夜も、かおりの艶やかな歌声が日本全国各地でこだまする。

期待される演歌の姿を見事に演じている香西かおりの「最北航路」。くどくなく、淡く女の情感を歌い、宗谷や利尻といった寒々とした景色に女の思いを託していく。「放浪歌」では、螢の命に思いを重ね「いい思い出があれば」と女の人生をゆったりと歌う。

押しどころと退きどころの兼ね合いが絶妙。香西かおりの唄は、シットリと絡みつくようでありながら決して濃味ではないところに、その味わいがある。曲調はド演歌なのにそこはかたなくポップス系の香りがして、そのあたりが香西味の秘密なのかもしれない。

最新ヒット曲「浮雲」は、恋の未練に心寒く身も細る女の歌だが、どこか傍観者的な雰囲気漂ういかにも香西らしい仕上がり。

かなわぬ恋、せつない恋、つらい恋などに身をやつしながら健気に耐える女心がテーマで、初期

のヒット曲「恋舟」「流恋草(はぐれそう)」も収録のベスト・セレクション。香西は、この世の不幸を一身に背負い、悲恋の主人公になりきっている。

哀しい世界をうたっても、この人の歌声には何処かに救いがある。決してドライなイメージではないが、割り切り方のうまさとも言えはいいのだろうか。気っぶのよさが歌にも表われているようだ。多方面への広がりを感じさせる歌手としてますます興味深い。

薄幸の女を予感させるさびしげな歌声が香西かおりの演歌の基本形をつくっている。決して力むことなく、普通を装っていても肩がさびしげであったりするポーズをとる歌声が魅力なのです。内気とか強気とかとは違う、なぜか男とはぐれてしまう女を演じる。

中庸感覚の演歌であり、かおりちゃんの歌声は詞の内容ほど男にすぎることなく、逆に当世娘を反映してか、程々に自立しているように聴こえる。歌との距離を保った歌声だ。

代表曲

雨酒場（1988.5.25）レコード大賞新人賞を獲得

流恋草（1991.3.25 日本有線大賞を受賞

花挽歌（1992.7.25）日本歌謡大賞を受賞

無言坂（1993.3.17）この年の日本レコード大賞受賞曲 またオリコンシングルチャートトップ10に入った。

浮雲（1998.9.2）

あなたへ（2002.2.6）村下孝蔵の遺作。作詞は香西本人が担当。

シングル

雨酒場（1988年5月）

恋舟（1990）

流恋草（1991）

花挽歌（1992）

恋紅葉（1992）

無言坂（1993）

恋慕川（1994）

越前恋歌（1994）

ごむたいな（1995）

宇治川哀歌（1996）

すき（1997）

雨降橋（1997）

浮雲（1998）

望郷十年（1999）

最北航路（2006）

演歌・歌謡曲系の若手男性歌手では、この10年、氷川きよしの独走状態だったが、ジェロと、三山ひろしが出て来て、やっと状況が面白くなってきたようだ。ただし、すでに月と何とか程の距離があるが。すこし有利な点を探すと、ジェロは外国人としての、氷川にはない強味（たとえば、全世界への、演歌・歌謡曲の発信が可能だ。欧米の曲も、並行して発信できる。）がある。三山ひろしは、その卓越した歌唱力で、氷川とは違う方向性と味付けで、これから新しい鉦脈を開拓していけそうな気がする。曲さえ選べば、そうヒットしなくても、階段を登れる実力がある。けれどまあ、氷川はすでに大成功を収めているという、厳然とした地位の違いがあるけれど。

2002年のこの曲は、歌謡曲の王道と言うべき、別れた恋人を忍び、思い出を訪ねるという、切なさや哀愁を、明るくロマンティックに歌い上げたもので、詞、リズム、メロディーともに、第一級品だ。

怒涛が逆巻く 玄海灘の 潮の香りが 懐かしい 一夜ひとよに 夢見ごろ 恋の花咲く で
あい橋 ひと眼逢いたい こんな星の夜 あの眼 あの声 あの笑顔 もういちど---

(収集プロフィール)

氷川きよし（ひかわきよし、1977～ ）は、福岡県福岡市南区出身の歌手である。

経歴

福岡市立高宮中学校を卒業後、福岡第一商業高等学校に入学し、卒業。

2000年2月、氷川は「箱根八里の半次郎」を発表し、演歌歌手としてデビューした。

また、歌手以外にも、タレント活動や歌謡劇などを行っている。

*ミレニアムを迎えた00年。世界各地で天変地異が猛威を奮う中、ここ日本の演歌界でも激震が起こる。そう、“ヴィジュアル系演歌”なるニュー・ジャンルを持ち込んだ氷川きよしの登場だ。ビートたけしを名付け親にもち、ジャニーズ系のルックスに三つボタンのスーツを着込んだ氷川は、「クラブ通い（←銀座ではない）が趣味」と公言してはばからない新人類である。22歳という若さで義理と人情の股旅演歌を唄い、コブシをまわす彼からは、年寄りだけのものになってしまった演歌を同世代の若者にもアピールする気概が見て取れる。そんな中、発表された「箱根八里の半次郎」（00年）は、「やだねったら、やだね♪」という覚えやすいリフレインも幸いし、デビュー曲としては異例の60万枚以上の売り上げを記録。以降の輝かしい活躍ぶりは周知の通り。氷川きよしには、21世紀の演歌界を背負っていくと共に、演歌の枠を越えた活動が期待される。

*2008年の紅白歌合戦では白組の大トリをつとめた。

歌手・芸能人としての特徴

楽曲

股旅物など、時代劇の定番の曲を、和服ではなく洋服で歌うことが多い。また、春日八郎など、往年の高音の演歌をアルバムに収録。

さらに氷川は、ムード歌謡的な歌（往年の「ズンドコ節」のアレンジなど）も多く唄い、歌番

組（きよしとこの夜など）では、ポップス曲も数多く披露している。ポップス曲のCDも年に1回程度発売しており、その際には「KIYOSHI」の名義を用いている。

氷川の歌には振り付けがなされているが、ファンが覚えやすいよう、複雑な動きを取り入れず、比較的簡単なものとなっている。

容姿

前述の衣装も含め、外見はアイドルタレントのようではあるが、礼儀正しく歌唱力もあり、非常に演歌歌手らしい歌手で、「演歌界の貴公子」と呼ばれる。

ファンとの関係

氷川は常に、自分を応援するファンに対する感謝の心を忘れず、コンサートグッズにも「感謝」の文字が書かれている。ファンを大切にするその人柄から、熱狂的な中高年女性ファンが多い。

人柄

両親や祖父母を大切にしており、仕事でもチャリティーに積極的に参加している。

テレビ朝日神出鬼没!タケシムケンでは知名度上昇の為に街角を歩き続けたが、「箱根八里の半次郎」がヒットする前だったために一般人からの反応が薄く「僕、本当に売れるんですかね？」と不安げに言っていた。

シングル

箱根八里の半次郎（2000年2月）

大井追っかけ音次郎（2001年2月）

きよしこの夜（2001）河村隆一プロデュース。「KIYOSHI」名義

きよしのズンドコ節（2002）

星空の秋子（2002）

白雲の城（2003）

ラブリエ（2003）中村玉緒とのデュエット。

きよしのドドンパ（2004）

番場の忠太郎（2004）

初恋列車（2005）オリコン週間シングルチャートで初の1位を獲得

面影の都（2005）

一剣（2006）

あばよ（2007）

きよしのソーラン節（2007）

初の2枚同時リリース。

玄海船歌（2008）

哀愁の湖（2008）

浪曲一代（2009）

ときめきのルンバ（2009）

三味線旅がらす（2010）

久し振りの、佳曲とっていいだろう。全体に静やかなメロディーで、哀愁が深く、普段は忘れがちなことを思わせる。雨をモチーフに、男との別れを回想しながら、歌謡曲ながら、なぜか哲学的想念にまで達している。歌詞の、過去と現在、現在と未来を、ゆったりながらやや迷走しつつ、往還する感じが、この曲にとっても合っている。五木のメロディーも、けっして小野彩（藤あや子自身である）の作り出した世界を邪魔せずに引き立て、間奏や後半の要所で盛り立てている。「忘却の雨」（詞：小野彩 曲：五木ひろし） 降るはずのない 雨がしとしとと 足りなかった 愛の数だけ心に突き刺さる---手のひらに 打ちつける激しい雨を 目頭に当て 涙はらはらと---偽りでも 愛に溺れてこのまま眠りたい---いつか私を探し求めて すべてを忘れる 忘却の雨（ウィキペディアより）藤 あや子（ふじあやこ、1961～ ）は日本の歌手である。秋田県仙北市（旧・仙北郡角館町）出身。*山崎ハコの曲では微妙に艶歌からすり抜ける。さらにディスク4は「小野彩」名義の自作曲を中心に、反・艶歌的なサウンドの曲や、歌唱を展開している。艶歌一辺倒に埋没するのではなく、地がヘヴィ・メタル好きという彼女のバランス感覚もうかがえる内容。*「心の襞」女性の儂い心模様を描き出した作品で、ガラス細工のように繊細な雰囲気が見事に歌い上げられている。名曲「夢芝居」を思わせるダイナミックなイントロから一転、しっとり語りかける構成。女の心の襞に刻み込まれた思い出が乱れ散るような起伏に富んだ歌声が、耳をとらえて離さない。*実力派美人シンガー。熱爛の香り漂う“おんなの世界”を歌わせたら、間違いなく宇宙最高峰。89年に「おんな」で華々しく登場。いきなり、20万枚を越える好セールスを記録した。以来、「雨夜酒」「こころ酒」と着実にヒットを飛ばし、不動の地位を獲得。デビュー以前の民謡歌手としてのキャリアを存分に生かした、伸びやか、そして艶のある極上ヴォイスは、小料理屋、スナック、大衆酒場、トラック、波止場、お茶の間、などなど、日本全国津々浦々に染み渡っていった。1992年、「こころ酒」で日本有線大賞を受賞。1994年、「花のワルツ」で日本有線大賞を2度目の受賞。*「さんまのまんま」にて20歳で娘を出産し、離婚後にデビューをしたと語っている（1981年に結婚。出産の後、翌年に離婚。なお、別れた夫も離婚後に自殺している。）本人は別に隠していた訳ではないが、妖艶な雰囲気から子持ちに見られないので知らない人も多い。*意外にも抜けている性格だという。仕事の移動で飛行機に乗った際に着陸した後、ベルトを外した時に誤って私服のズボンのベルトも外し、そのまま歩いて降りようとした事がある。プライベートでは専らジャージ姿で過ごしている事が多く、家用のジャージとお出かけ用のジャージがあるとのこと。主な曲 1989年「おんな」オリコン88位 1991年「雨夜酒」57位 1992年「こころ酒」6位 1993年「むらさき雨情」8位 1994年「女泣川」10位 「花のワルツ」19位 1996年「紅」25位 1997年「うたかたの恋」29位

成世の唄は、どこか遠い所から聞こえてくるような、感じがある。いちおう、民謡から出て、演歌も、といった路線にはあるのだけれど。従来の、その系の歌手とは、そこが違うような気がする。他者の胸に無理に入り込む事にこだわらず、自分が作り上げた世界を提示することに、重きを置いているような。50万枚を記録したこの曲は、一般には一番よく知られているであろう。サビにおける、その驚くほどの高音は、一聴に価する。

(詞・もず唱平 曲・聖川湧)

立山に両の掌(て)合わせ せめて便りが 噂が欲しい---ふるさつを見捨てた人の 身の上を 茜に染まる 空見上げ---

(収集プロフィール)

成世 昌平 (なるせ しょうへい、1951-) は、広島県三次市出身の歌手。

プロフィール

昭和49年 民謡の勉強を始める

昭和52年 産経民謡大賞 青年の部 優勝

昭和53年 産経民謡大賞 青年の部 優勝

昭和54年 日本民謡 甲会 を設立 会主となる。

昭和58年 佐藤 清 氏の指導を受け、大阪に越中おわら教室を開設。

昭和59年 本條秀太郎 師匠に師事。

昭和60年 日本クラウン専属契約。『博多節 / 福知山音頭』でデビュー。

昭和62年 NHK民謡オーディション合格。鶴沢勘八 師匠に義太夫の指導を受け始める。

日本クラウンより『寿』(高安 弘 詞 福田 正 曲) 10万枚のヒット。

この年より10年間 大阪国立文楽劇場にてリサイタル。

人形平成 3年 細野晴臣 総合プロデュース / 本條秀太郎プロジェクト 『海照』 コンサートツアーにヴォーカルとして参加。東京・大阪・福岡・北京などで公演を行う。

平成 6年 力丸 師に師事。上方はうたの勉強を始める。

平成 8年 日本クラウン『浪花なごり月』(南沢純三 作詞 / 中村典正 作曲) 発売。

平成10年 滋賀県土山町の依頼により同町の小中学校で鈴鹿馬子唄の指導を始める。

平成14年 (財) 日本民謡協会 民謡技能彰 受彰

平成15年 古今亭八朝 独演会に客演 鈴本演芸場で落語を披露

平成17年 名古屋御園座 1月公演「ジパング」にホームレスのお婆さん役で出演

* 歌謡曲・民謡その垣根を越えた歌手として活躍。その活動のエリアは、未だとどまる事を知らないようである。

ラジオのDJ・TVCMでも活動。民謡の指導・発掘作業や研究・民謡の活性化のための活動も行っている。

* 日本の原風景を歌い続ける成世昌平の2007年発表のシングル。「稗つき節」の作詞者、酒井繁一に捧げた「ノスタルジア椎葉」では、ブラジルに移民した彼の望郷の念が叙情的に綴られて

いる。

*NHKラジオ「ユアソング」のタイアップ曲で、タイトル曲は雄大な日本海を挟んで島に残した人への望郷の念を描いた民謡調の演歌だ。

「坂東太郎」とは「利根川」の別名で、利根川沿いの佐原に題材を求め、同郷人の友情を描いた望郷演歌。「はぐれコキリコ」のテイストを受け継いだ好楽曲で、成世昌平ならではのハイ・トーンも堪能できる。

*NHK大阪開局80周年を記念して発表されたコテコテの大阪音頭。これだけ臆面もなく歌われると地元の人でもさぞや気恥ずかしかろうと思うが、伸びやかで愛嬌のある歌声には不思議と心和む。成世昌平は、関西を拠点に活動する実力派の演歌・民謡歌手。

青森県鶴田町、津軽富士見湖に架かる日本一の木造三連太鼓橋「鶴の舞橋」がテーマ。北国から鶴が舞い降りたとされる伝説に基づく、男女の悲恋を美しく描いた、成世昌平のハイトーンが活きるナンバー。

*「はぐれコキリコ」のヒットはここから生まれた。歌手・成世昌平のルーツ、民謡の世界を収めたアルバムの再発盤。朴訥とした味わいの中にも粋を窺わせる、成世の魅力。ニッポン万歳!

*1974年から民謡の勉強を始め1985年、日本クラウンと専属契約。「博多節／福知山音頭」でデビュー。ハイトーンボイスで1987年発売の「寿」が10万枚を超えるヒット。1996年「浪速なごり月」発売。2002年に出した「はぐれコキリコ」がロングセラー50万枚の大ヒットとなっている。2006年9月、鳥取・浜村温泉に伝わる『貝殻節』をモチーフとした「貝殻恋唄」発売。

昭和中期以降の日本のマス・メディアは、伝統的な日本の理想の男のタイプを、崩すことに躍りになっていた感じがある。豪快なイメージの芸能人やスポーツ選手が、実は甘いお菓子が大好きだったり、お酒に弱かったり、とんでもないお間抜けだったり。いわゆるアニキ・タイプ、親分タイプの人、裏の顔を晒して、イメージを崩そうというような。あるいは、品のよいエリートや謹厳実直タイプが、実はドケチだったりド助平だったり、お間抜けだったり。

事實は、いずれ現れるものなので、批判している訳ではないが、それによって日本の男の価値がぐんとさがったのも事実であろう。この曲は、それがまだ始まる前の、いい男、िकास男のイメージに沿って、すべてが作られている。裕次郎や小林旭を一般化したような男と、トラウマを抱えた女の物語である。1970年代前後の、歌謡曲が輝いていたときのテイストを、詞とメロディーにたっぷり取り入れて、ムードたっぷり、ロマンたっぷりの、大人の唄に仕上げている。

この10年、中ヒットながら佳曲・名曲が続いている山本譲二。唄も、深みを増している。これらは、もっと年を取ってから、歌手としての素晴らしい財産となるだろう。

すこし痩せたのか 雨のせいなのか 濡れた肩先 小さくなった おそい出逢いの恋だから
がまんするなよ---

(ウィキペディアより)

山本 譲二 (やまもと じょうじ、1950～) は、山口県下関市出身の歌手、俳優。「琴五郎」名義で、楽曲の作詞・作曲も行う。

来歴

甲子園に出場

早稲高校時代の1967年、夏の甲子園出場。松商学園（長野）に敗れるも、代打出場ながらヒット（内野安打）を打つ。

不遇の下積み時代

演歌歌手になりたくて上京。多くの職を転々とする。クラブのボーイ時代、お客の飲み残しのビールを飲み干す。中にはタバコの吸い殻がたくさん入っていた。肝臓を壊しやむなく帰郷、ひっそりと療養生活を送る。母親の叱咤で強い決意を持ち22歳で再び上京。再び職を変えながらスナックでギターを手に2年間弾き語りを続ける。たまたま店に来た浜圭介に誘われ芸能界入りした。1974年、映画「ダーティハリー」にかけて、「伊達春樹」という芸名で「夜霧のあなた」でデビューしたが、パツとせず、崖っぷちに立たされた。

北島三郎との出会い

最後の決意で北島三郎の仕事場に何度も足を運び頭を下げ、十数回繰り返したときに北島から突然、鞆(かばん)を渡された。即ち「鞆持ちになれ」という意味であり、以降2年間北島の付き人を務める。25歳だった。これを契機に1976年、読売テレビ制作の歌謡オーディション番組「全日本歌謡選手権」（当時は浜村淳が司会）に出場、「おもいで岬」や「中の島ブルース」などを歌って見事10週勝ち抜いた。本名でもある「山本譲二」名義でポニーキャニオンから再デビュー。

またも鳴かず飛ばずが続く。

移籍

平成に入ると演歌が急速に衰退、1999年には所属していたポニーキャニオンが演歌・歌謡曲部門の廃止を決定。このためテイチクへ移籍、2000年には移籍第1弾シングル「花も嵐も」を発売する。

事務所から独立

2007年から独立して個人事務所を立ち上げた。暖簾分けという形であり、今も北島音楽事務所とは業務提携という形で、つながりを持つ。

病気告白

2009年7月、右耳内部に良性腫瘍ができていたことが明らかになったものの、除去手術を行った場合顔面麻痺が残る可能性があることから、手術するかどうかわからない胸中をブログに綴った。

主な曲

- 1.夜霧のあなた ※伊達春樹名義 1974年7月発売
- 2.帰っておいで ※伊達春樹名義 1975
- 3.そばにおいでよ ※山本譲二で再デビュー 1976年7月
- 4.北ものがたり 1978
- 5.眉子/男の影法師 1979
- 6.みちのくひとり旅 1980年8月
- 7.旅の終りはお前 1982
- 15.奥州路 1984
- 16.北情歌 1985
- 17.男詩 1985
- 20.夜叉のように 1987
- 24.時は流れても 1990
- 27.奥入瀬 1992
- 31.関門海峡 1994
- 32.棒の哀しみ（映画「棒の哀しみ」主題歌/黄昏にふたり【叶和貴子とデュエット】 1994
- 42.俺がいるじゃないか 1998
- 45.花も嵐も 2000
- 46.おまえにありがとう 2001
- 47.しあわせの青い鳥 2001
- 48.都会の子守歌 2002
- 49.おまえと生きる 2002
- 55.名もない花に乾杯を 2005
- 57.新宿の月 2006
- 62.泣いたらいいさ（作詞：城岡れい、作曲：弦哲也） 2008
- 63.俺たちの春 2009

*元高校球児である彼は、24才で歌手デビューを果たすが、芽が出ずに長い下積みを経験する。しかし、北島三郎（通称オヤジ）に入門し、78年「北ものがたり」で再デビュー。そして「みちのくひとり旅」（81年）が、念願の大ヒットを記録する。新宿での流しから始まり苦節10年、まさに叩き上げの演歌人生だ。

山本の出身は本州最南端・下関なのだが、「みちのく」を筆頭に、「奥州路」「夢街道」と、もち歌には東北をテーマにしたものが多い。やはり暖かい南よりも自然の厳しさを感じさせる地方を舞台にしたほうが、山本特有の切ない男心を噛みしめるような演歌には、ピッチはまりやすいのだろう。すぎる女を振り切って、行かなきゃならない男の辛さ----

*つらい時代だからこそ笑顔でいたい、という譲二ワールド全開の心にしみ入る人生讃歌だ。

*山本譲二の大全集。力強いヴォーカルも哀愁を交えた歌いまわしも、自由自在にこなしてしまう彼の表現力が存分に味わえる。

*明治維新の一翼を担った「高杉晋作」を歌った曲で、そのディテールの細かさや情景描写が美しい。力強い山本のヴォーカルはもちろん安定感があり、歴史という史実である物語に負けない説得力がある。大海原のようなスケールの大きさを感じさせる歌。

三代は、相当な力量を持っている。声の印象は、個性的で硬めの美声だが、4、5曲聴くうちに、低めの語りから、柔らかな主声、中期までの決め技であったであろう、高音の美しい裏声のコブシ、など多くの歌唱法を駆使している事が分かる。

風にこぼれる 花びらが 揺れて流れる 桜川 時の短さ 移ろいに 心しみじみ せつなくて--

--

(収集プロフィール)

三代 沙也可 (みしろ さやか、19XX～) 大分県出身の演歌歌手。神戸でのOL生活を経て、関西圏でデビュー後、阪神淡路大震災をきっかけに、1995年、東京に進出した。データ不足のため、略歴等は不詳。

*『港のれん』は、男歌。押さえの効いた硬質の声が伸び、東京に置いてきた女を、港の酒場で偲ぶ男の重い心を唄い上げる。

*作曲は三代の師匠、伊藤雪彦。入門以来、彼女は彼の事務所に所属している。

*京しぐれ 得意とする男唄だった「倅せもやい酒」や、10万枚ヒットを記念した「酒がたり」に続く三代の新曲。しっとりとした女心をしなやかに歌った王道演歌で、新境地を聴かせる。

*桜の川 母性を湛えた落ち着いた歌唱は本作でも健在。疲れた心にやさしく響く、癒しの演歌となっている。

主な曲

貴船川

あなたの女 2009 (オリジナルの歌唱は高田みゆき・1981)

酒がたり 2002

桜の川 2010 (詩:麻こよみ 曲:伊藤雪彦)

まさに大人の唄といえる、一曲。深みのある語り口で、納得のいく歌唱。これだけの歌手が、まだ隠れていたことにビックリ。デビュー曲が、折からミニブームの社交ダンスの楽曲に使われて、実売数を伸ばしたという。チャンスも上手く掴んだ、ということだろうか。ともあれ、40代以下向けの曲が多いなかで、秋元は大人の唄を歌える、頼もしい存在である。

小鳥たちは何を騒ぐの 甘い果実が欲しいのですか だれかとくらべる幸せなんていらぬ
あなたの視線が---

(収集プロフィール)

秋元 順子（あきもと じゅんこ、1947～ ）は日本の女性歌手。東京都江東区深川生まれ。ハワイアンバンド出身であるが、幅広いジャンルを歌う。

歌手生活の始まりはハワイアンバンドであるが、スタンダードやシャンソン、カンツォーネ、ラテン、ポップス、民謡、歌謡曲など、ジャンルを問わず幅広くライブ活動をする中、デビュー曲「マディソン郡の恋」と出会い2004年4月にインディーズで発売。

ルンバのリズムにのせた哀愁溢れるアレンジと、秋元の伸びやかで心に沁みる歌声が、一度聞いたら忘れられないと評判に。

*「マディソン郡の橋」をモチーフにした切ない大人の恋物語を、ルンバのリズムにのせた哀愁溢れるアレンジと、秋元順子の伸びやかで心に沁みる歌声が一度聞いたら忘れられないと大評判に。インディーズ発売直後から口コミで広がり、有線問い合わせランキングで連続1位になり、05年7月、58歳でメジャーデビュー。

*従来の歌謡歌手の中にあって“ありそうでなかった”魅力ある中低音の情感溢れる歌声が中高年を中心に圧倒的に支持される。そんな中で08年に発表された「愛のまで・・・」は、大人の愛を歌いあげる秋元順子の真骨頂といえるナンバー。ポップスでも演歌でもない彼女の音楽はマチュア世代（40代以降の成熟した大人）へ向けた歌謡の新たな潮流として注目され、08年「第59回紅白歌合戦」に女性歌手としては歴代最高齢での初出場を果たす。61歳での初出場は紅組史上歴代最高齢記録である。初出場歌手会見の報道では「団塊世代の星」と評された。

人物

高校卒業後、石油会社で働きながら、ハワイアンバンドで音楽活動を行うが、結婚を機に主婦業に専念。家業の花屋を営む傍ら、子育てから手が離れた40歳頃に昔のバンド仲間から誘われ音楽活動を再開。

57歳で「マディソン郡の恋」を徳間ジャパンからインディーズ発売し、異例の「有線お問合せランキング」1位を獲得。

趣味は自動車の運転。特技はフラワーアレンジメント。

幼少時は児童劇団に所属し、時代劇女優志望だった。石原裕次郎主演映画『青春とはなんだ』で生徒役としてエキストラ出演。オヤジギャグを多く発する。

同じレーベルに所属するヒップホップユニット・CLIFF EDGEのミニアルバム『VOYAGE』に収録されている「終りなき旅」という楽曲にAJという名義で参加している。

*アコーディオンの音色から始まる、哀しげで人間臭い演歌の世界感。彼女の深い歌声は、人生の酸いも甘いも噛み分けた練達の響きで、説得力があり落ち着く。ドラマティックに展開する楽曲もしかり、人の数だけ人生あり、と喚起させてくれる。

*ボサ・ノヴァやジャズなどの幅広いテイストを備えた、成熟したヴォーカルが歌にリアリティを添える。平凡な日常の幸せを描いた「ひだまり」など、ヒット性も高い。

*彼女の魅力である伸びやかなハスキー・ヴォイスをじっくりと堪能できる。

*「マディソン郡の恋」ラテン・リズムを採り入れた渋いアレンジで、大人の心情にフィットする切ない言葉を歌う、21世紀の歌謡ポップス。

シングル

マディソン郡の恋（2005年7月） 作詞・作曲：星桂三

c/w 「月の浜辺」（詞：長平俊一、曲：花岡優平）

雨の旅人（2007年2月） 作詞・作曲：花岡優平

c/w 「ロンリーナイト・東京」（詞・曲：花岡優平）

愛のままで...（2008） 詞・曲：花岡優平

c/w 「忘れもの」（詞：花岡美奈子、曲：花岡優平）

黄昏Love again（2009） 作詞・作曲：花岡優平

c/w 「愛の歌売り」（詞：峰崎林二郎、曲：花岡優平）

この曲を取り上げるのに、かなり躊躇した。ブームに乗って、ご一緒にという感じに取られるのは嫌だし…。そんな事よりも、ありていに言ってしまうえば、この曲が、私の中で、名歌まで届いていないと言う事だろう。いい曲ではあるが、名歌までは、どう甘く見ても、かなり距離がある。ただし、この曲の、革新的意義という点からみると、これは大が三つ付くほど素晴らしい。長い年月に、幾層にも積もった、演歌・歌謡曲の濁りや沈滞を、とりあえず、かなり吹き飛ばしてくれた。演歌の、これからの新しい音楽性を、提示してくれている。

(詞/秋元康 曲/宇崎竜童)

あなたを追って 出雲崎 悲しみの 日本海---積もることの無い まるで 海雪

(収集プロフィール)

ジェロ (JERO、1981～) は、日本で活動するアメリカ人歌手。『史上初の黒人演歌歌手』として多数のメディアに取り上げられた。話題を集め、ヒット・チャートの上位に食い込んだデビュー曲。王道の演歌を彼は、オーセンティックな「日本の」ヴォーカル・スタイルで堂々と歌い上げている。どこかサンタナっぽいギターもシブい。

*正直驚いた。黒人歌手としてブレイク中のジェロが、演歌や歌謡曲の名曲をカバーしたミニアルバム「カバーズ」だ。ただの演歌ではないとは予想していたが、このような形で演歌とロック音楽を融合するとはまったく予想外だった。平成生まれの若い世代も日本の歌謡曲や演歌に興味を持つこと間違いなし。

シングル「海雪」でデビューしたジェロだが、ラップ歌手のような出で立ちながら、確かな発音の日本語を駆使し、折り目正しい演歌をモダンに聞かせる実力派であることを証明した。しかも本作では彼の歌声だけでなく、楽曲そのものがロック音楽の要素を取り込み、モダンに生まれ変わっている。

佳山明生らが歌った「氷雨」は、サンタナの「哀愁のヨーロッパ」風の艶(つや)やかなギターが炸裂。五木ひろしの「夜空」ではドゥービー・ブラザーズの「ロング・トレイン・ランニング」とそっくりの軽快なイントロからロック調のビートで「♪あの子～」。

さらにチャー・ヨンピルの「釜山港へ帰れ」では、元メガデスのギター奏者で現在、日本でタレントとして活躍している米国人マーティー・フリードマンがイントロや間奏でギンギンのヘビーマタル・ギターを弾き倒す。

それにしても、西洋の音楽であるロックの助けを借り、米国人の演歌歌手から演歌の良さを教えてもらうことになるとうとは。

略歴

アフリカ系アメリカ人の父親と、アフリカ系アメリカ人と日本人のハーフの母親(祖母が横浜出身の日本人)のもと、ペンシルバニア州のピッツバーグに生まれる。母方の祖母は日本人で、その影響から幼少の頃より演歌に親しんできた。その祖母に対して演歌を披露するうちに、自らが演歌の虜になっていったという。

E・ガーディアンシップ・グループ主催の第3回高校生による日本語スピーチコンテストに参加す

るために15歳になって初めて日本の地を踏む。スピーチタイトルは「ぼくのおばあちゃん」。ダンスチームの主将を務めた高校時代を経て、やがてピッツバーグ大学に進学し情報科学を専攻。在学中には関西外国語大学に3ヶ月間の留学をした。この留学期間中に演歌歌手になることを決意したという。

ピッツバーグ大学を2003年に卒業したのちに再び日本の地を踏み、和歌山県で英会話学校の教職、次いで大阪でコンピュータ技術者の仕事に就く。その傍ら、『NHKのだ自慢』(NHK)など日本各地のカラオケ大会に出場し、そこで数多の賞を獲得するなど、演歌歌手を目指して独自に活動を続けた。そして2005年、坂本冬美の主催によるカラオケ大会で優勝した際、ビクター大阪のスカウトの目に留まり、オーディションを渋谷のカラオケボックスで受けて合格。審査員は「礼儀正しく、何をリクエストしてもきれいに歌う」と評価している。

その後2年間に及ぶ訓練を経て、2008年にシングルの「海雪」でプロデビュー。デビュー日となった2月20日には、演歌歌手としては前例の無い渋谷HMVでのイベントを行い、デビュー曲の「海雪」を披露して会場を沸かせた。

演歌歌手という立場でありながらヒップホップのスタイルを採り、その外観だけならば完全なラッパーである。プロモーションビデオもラップのバックダンサーを用いるなど、一見ただけでは演歌のそれとは分からないものとなっており、一部のCS局では演歌扱いされていない。

その容姿については『ウィル・スミス似のイケメン』などと表現され、その歌声については『一聴では日本人のそれとしか思えない』、『甘い歌声』などの評価が寄せられている。

デビュー曲となった『海雪』は、新潟県の出雲崎町を舞台とした楽曲。冷え込みの著しいシングル市場にあって、その発売から5日間のうちに3万5千枚の売り上げを記録。ヒップホップダンスも特技としており、『海雪』のダンスバージョンの振り付けはジェロ本人が行った。敬愛するヒップホップ・アーティストは2パック。

好きな日本語は「ちんぷんかんぷん」、好きなアーティストは坂本冬美、好きな食べ物はホッケ。納豆も好き。わさびととろろは苦手だという。

シングル

海雪 (2008)

ミニアルバム

COVERS (2008)

関連項目

チャダ (本名：S.S.Chadha、1952-) は、1970年代に日本で活躍したインド人演歌歌手。ジェロと比較すると、チャダの歌唱には、インド訛りというか、独特のイントネーションと違和感が残る。音程も、いちぶ不安定だ。スタッフは、キワモノとしての売り出しを、避けるべく、懸命な努力をしたそうだが。この時代に、そんな熱い意思があった、と、私はとても感銘を受けた。

*日本テレビのバラエティ番組「金曜10時!うわさのチャンネル!」への出演で人気を博し、1975年8月に「世界初のインド人演歌歌手」としてデビューした。シーク教徒らしいターバン姿と、北島三郎直伝のその完璧な日本語による歌唱のギャップで大きなヒットとなり、様々な音楽賞の新人賞を受賞。なお、当時は大橋巨泉事務所 (現「オーケープロダクション」) に所属。

現在

その後芸能界を引退し、現在はインドを拠点に、貿易会社の社長として日本やアジア各国を中心に活躍しており、日本人との商談の最中において、「あのチャダさん!？」と驚かれることも多いという。

また、近年においても数年に1回は「あの人は今」などのテレビ番組の企画で取り上げられている。なお近年では、「世界初の黒人演歌歌手」として高い人気を誇るジェロにからめてテレビなどで取り上げられることが増え、同年4月20日に放送されたTBSの情報番組「サンデージャポン」に登場。

主な曲

「面影の女/やもめのジョナサン」1975年8月。詞：山口洋子、曲：猪俣公章、編曲：松木謙一、ビクター。

「恋女房/ゆきずりの女」1976年、ビクター。

「石巻ブルース」ビクター。

新曲「爪跡」が出た。なかなかの、佳曲である。さて「試練」は、現代の股旅物風の詞と、スケールの大きなメロディーがよく合い、しばし明日のわが身を考えさせられる。あるテレビ番組で、ジェロ自身が言っていたが「ぼくが、合羽を着て三度笠を持って歩いたらコントになってしまう」という言葉通り、ジェロの場合、橋幸夫や尾形大作（新宿旅烏・この曲も現代の股旅物）、香田晋のようにはいかないだろう。私の希望は、もちろん現代という状況のなかでの、恋や野望、人生などを、股旅物風に唄ったもの。このエリアで、ジェロは意外にも、いい曲を唄えるのではないだろうか。

(詞・山上路夫 曲・春畑道哉)

風が吹く日暮れの道 どこまで行けばいいのか 風来の男ならば 待ってる宿も---生きる事は
試練か 負けちゃ今日を越えられぬ 明日もちがう試練が 俺のことを待っている---

(収集プロフィール)

ジェロ (JERO) は、アメリカ合衆国・ペンシルベニア州ピッツバーグ出身の歌手。『史上初の黒人演歌歌手』として多数のメディアに。『演歌界の黒船』の異名をとる。

略歴

1990年頃からペンシルベニア州のピッツバーグで育つ。母方の祖母は横浜出身の日本人で、その影響から幼少の頃より演歌に親しんできた。その祖母に対して演歌を披露するうちに、自らが演歌の虜になっていったという。

祖母が日本人で父親がアフリカ系アメリカ人で、母親はアメリカ人と日本人のため、ジェロ自身は、4分の3がアメリカ人で4分の1が日本人のクォーターである。

2008年にシングルの「海雪」でプロデビュー。2008年6月には初のミニアルバムを発売。8月27日（日本時間28日）には母校ピッツバーグ大学で無料凱旋ライブを行い、学生や地元住民など500人以上の聴衆がつめかけた。

2008年に行われた『第59回NHK紅白歌合戦』に初出場、実母も来日し会場で感涙した。ジェロはデビュー当初から亡き祖母のために紅白歌合戦出場を強く望んでいた。

2009年に行われたワシントンD.C.での桜祭りでは、凱旋コンサートを開催し演歌三曲を熱唱。また、2008年12月30日にデビュー曲「海雪」で第50回日本レコード大賞の最優秀新人賞を受賞した。

演歌歌手という立場でありながらヒップホップ系ファッションを採り、その外見はラッパーのスタイルに通じるものがある。プロモーションビデオもラップのバックダンサーを用いるなど、一見ただけでは演歌のそれとは分からないものとなっている。

5年ほど、関西にいた事から時々関西弁を使う事もある。

* 舞台となった出雲崎町では、町民を対象に『海雪』のCDの購入の際に町から補助費を出す法案を可決し、町ぐるみでジェロを応援した。

* 好きな日本語は「一期一会」と「ちんぷんかんぷん」、好きなアーティストは坂本冬美、五木ひろし。好きな食べ物はホッケ。納豆も好き。わさびととろろは苦手だという。日本食は作れな

いが、無洗米を自炊している。理想のタイプの女性は女優の釈由美子、タレントでミス・ユニバース2006年世界大会2位の知花くらら。NON STYLEの石田明と仲が良い。

シングル

1 海雪 2008年2月 演歌として異例のヒット。

2 えいさ 2009 作詞は一青窈。いっしょに歌お!CBCラジオ2009年2月の歌。

3 やんちゃ道 2009 『劇場版クレヨンしんちゃん オタケベ!カスカベ野生王国』主題歌。

4 爪跡 2009

アルバム

約束 (2009) 初のオリジナルアルバム。

ミニアルバム

COVERS (2008)

『氷雨』や二村定一、フランク永井が歌っていた『君恋し』、五木ひろしの『夜空』などをカバー。

配信限定

試練 (2008) - 『風来のシレンDS2』のイメージソング。アルバム『約束』にも収録されたが、ミックスが異なる。

映画

鈍獣 (2009年) 明役

クレヨンしんちゃん オタケベ!カスカベ野生王国 (2009年) 本人役

CM

風来のシレンDS2 砂漠の魔城 (チュンソフト) - 自身の「試練」という曲をバックに、ゲームの主人公の衣装 (合羽と三度笠) を手に砂漠を歩いている。

*褐色の肌を持ち、ヒップホップ・ダンスを踊りながら演歌を歌う男、ジェロ。81年9月アメリカ・ピッツバーグ生まれ。父も母もアフリカ系アメリカ人だが、母方の祖母が日本人だったため幼少から演歌を聴いて育つ。少年時代はアメリカ人として当たり前前にR&Bやヒップホップを聴きダンスにも熱中したが、やはり演歌を歌うことが一番だったという。名門ピッツバーグ大学を優秀な成績で卒業、エンジニアとして将来を嘱望されていたが、演歌へのつのる思いを捨てきれず03年に来日。NHK『のど自慢』など各地のカラオケ大会に応募し歌っていたところをスカウトされ、08年2月に「海雪」でメジャー・デビューを果たした。デビュー前から「黒人が演歌を歌っている!」とマスコミで大きく取り上げられてはいたが、秋元康/宇崎竜童コンビが生み出した楽曲の素晴らしさもあって「海雪」はスマッシュ・ヒット。日本人以上に控えめで努力家であり、祖母をこよなく愛するまじめなキャラクターも愛される理由の一つ。初出場した同年の紅白歌合戦で、母親を客席に呼び泣きながら「海雪」を歌い視聴者の涙を誘ったのは記憶に新しい。09年2月には2ndアルバム『約束』をリリースし、ムード歌謡から本格的な演歌ナンバーまでより深みを増した歌唱力を披露。

*「爪跡」大人のムードたっぷりの哀しい恋の歌で、作曲を手がけたのはTUBEの春畑道哉。デビュー・シングル「海雪」同様、幅広い世代のリスナーを魅了する一曲だ。

この人は玄人好みの歌手と、言われている。私も長い間、デビュー曲以外あまり知らなかった。歌唱力はかなりあり、オリジナリティーも十分にある。ただド演歌系は、あまり合わないようだ。演歌から、Jポップよりの歌謡曲までが、聴き心地がいい。今回の「日暮里挽歌」は、昭和の香り漂うしみじみとした雰囲気とストーリー、望郷的なメロディーが、じわじわと哀愁を誘い、とてもよい。この男女は、これから先、どのように生きていくのだろうか。あれこれと、思わせてくれる。

(宇山清太郎 詞 四方章人 曲 2009)

もっと おれより やさしいやつと 生きてゆくなら とめられないさ わるいのは おれなんだ
あやまらないで いいんだよ ためいきひとつ 真っ赤に染める 夕焼けだんだん---

(収録プロフィール)

半田浩二 (はんだ こうじ、1963～) 千葉県野田市出身の歌手。趣味は、釣り・ジョギング等。

昭和59年、TBS「街かどTV」に出演の際、作曲家・中山大三郎の目にとまり内弟子となる。4年間の修行のあと、昭和63年テイチクから中山大三郎・作詞作曲による「済州エア・ポート」にてデビュー。50万枚を超えるヒットとなる。

*最も近い外国・韓国の清州をテーマにした曲を3曲も含む半田浩二のアルバムは、演歌というよりもモダン歌謡と呼びたい雰囲気。ことにタイトル曲「済州エアポート」は、のけぞる程に見事な、歌謡サウンドをつくり出している。

*韓国歌謡から離れて、もうひとつ飛躍をとげようという半田の意欲的なアルバム。ちょっと甘い都会的な雰囲気のある種軽みを帯びた声が魅力。全体に言えるが、特に「ヨコハマ・コンチェルト」などは、カフェバーなどでのカラオケにぴったりの軽快な曲。

*中山大三郎に師事する演歌シンガー。五木ひろしを彷彿とさせる軽やかなタッチの歌唱と、間奏で入るギター・チョーキングのコンビネーションはまさに絶品。

*88年、シングル「済州エアポート」でデビュー。以来、通好みの情熱ソングをじっくりと発表している。

*演歌と呼ぶのだろうが、ちょっと洒落たアレンジを施したムード歌謡曲タイプの作品が半田浩二には多いようだ。ポンチャックを連想させるアップ・テンポの演奏にのってゆったりと歌う「済州エア・ポート」など中山大三郎の作品が面白い。

主な曲

無頼に生きて

ハーバー・ヨコハマ

済州エア・ポート

いつもの酒場で

ヨコハマ・コンチェルト

確率五割

大連の街から

濟州ブルース

麗水まで

海になれなれ夢の中

人生のいちばんいい時を

関東のメディアでは、たまに見かける程度だが、名古屋以西がメインの歌手なのだろうか。ド演歌は不向きな声質だが、歌謡曲やムード歌謡、洋楽などを、かなり幅広くこなせる力はある。今年になって、いい曲が出たようだ。関西が舞台の曲だが、柔らかな曲調で、特に違和感はない。なくした恋を、夜霧の夜景に語り掛けるような内容で、その日常的なリアリティーが、かえって胸に響くのだ。

* 1966年の、大月みやこの同名曲は異曲です。*

「大阪夜霧」(野々真結 詞・曲 2010)

雨の残した 水たまり うるむネオンの灯りが---弱い女の せつない胸を 抱いてください
大阪夜霧

(収集プロフィール)

加納ひろし(かのうひろし、1952?~)は、広島県広島市出身の歌手。旧芸名は事崎正司・嘉納ひろし。

高校時代、ハイジャンプの選手として活躍(イ位ティーンターハイ8位)。スポーツ特待生として大学推薦入学の誘いも全て断り、秘めていた歌の道に進むことを決意。最初は反対していた両親も、その熱意に負け一年という約束で上京。会社勤めをしながら、米山正夫の歌謡学院に入門する。1978年「燃える赤ヘル僕らのカープ」でソロデビュー。1988年作詞家荒木とよひさの元へ弟子入りする。

主な曲

「銀座」 1991 詞：荒木とよひさ 曲：木村好夫

「エル・クンパンチェロ」(2006 加納ひろし&小田純平) 詞：志賀大介 曲：小田純平

カ、カナメ様に、こ、こんな素晴らしいお唄が降臨するなんて！ややふざけてしまったが、この曲を、初めて聴いたときの、喜びとインパクトである。この昔ながらのガラッハテイストで、気さくで男っぽいジャガイモのような演歌歌手。去年、営業先らしい温泉ランド（多分）での渡辺の映像を見たのが、知り初め。シンプルな舞台、かつ侘しい雰囲気、音響の設備も悪く、観客の大半は、オバはんとお爺いさん。渡辺は、明るく頑張っていたが、歌唱力は香田晋レベル。カナメ様は、相当強烈なキャラクターで印象に残ったが、歌謡史に残る唄が、この方に回ってくる日があるとは、到底思えなかった。つまり、はっきり言って、数多い地方のB級歌手のイメージ。前作の「女のちぎり」は、小ヒットした佳曲だが、彼の声質やキャラからいって、かなり無謀な感じ。けれど、スタッフが優れているのか、この辺りからなぜか幸運にも、カナメ様が柔らかな上昇気流に乗ったのは確かだ。今回は、PVの出来もとても良い。撮影チームの腕がいいのか、いつもよりずっと男前に撮れている。「愚痴はこぼすな」のパートが1～3番を通じてそれぞれの、前置きのサビなのだが、渡辺はここで珍しく、伸ばしつつ張り上げつつ裏声に転じ、揉みあげる、という河内節の技法を取り入れている。これが、曲の世界を広げるのに、大きな効果を出している。というか私は、カナメ様が、こんな高難度なテクニックを駆使出来ることに仰天した。またメロディーの基底は定番の演歌ながら、大らかで力強い。編曲の腕も良く、太鼓や囃しの盛り上げが、心に素直に入ってくる。また、人生と社会を、適確に捉えた詞が、事のほか素晴らしい。まずは、演歌・歌謡曲系で久しぶりに、後世に残すべき価値のある曲が生まれたことを祝したい。

（水木れいじ 詞 すがあきら 曲 池多孝春 編曲）

浮いて沈んで 流されようが 義理と人情 捨てらりよか 愚痴はこぼすな 男じゃないか----

（収録プロフィール）

渡辺要（わたなべ かなめ、1950～ ）香川県出身の歌手。

略歴

歌手になる前は、寿司職人だったという。

平成6年1月、吉本興業の第一号の所属演歌歌手となる。

（平成16年2月独立）8月 テレビ朝日の「目撃どきゅん！」で「渡辺要ドキュメント」が放送される。

*自身初の女唄「女のちぎり」で芸幅を広げた渡辺要が、次に放つ新作は、得意の男唄「人生男節」。要節(かなめぶし)で勝負致します。～浮いて沈んで 流されようが 義理と人情 捨てらりよか～ という“男の道”を淡々と買った歌いだしからは、彼の、その壮大な人生観に引き込まれる。

*ボクは少しの成長もなく回りのスタッフや事務所のメンバーに支えられ、毎日休むことなく精一杯生きています。

*平成4年5月 『若と貴』（若花田・貴乃花応援歌）でデビュー。

5年9月 『兄弟街道』（応援歌第2弾）

6年9月 『男意気』（石坂まさを作家生活25周記念曲）。

8年6月 パリ音楽祭参加（日本人演歌歌手初）。

9年2月 『ごんたの海』

11年3月 『シーガルホテル』 『相惚れ酒』

13年6月 『胸の泣き虫』 『浪花仕込み』

15年2月 渡辺要ファーストアルバム「讃岐の女」「手酌酒」

15年12月 こんぴら観光親善大使に就任。

16年11月 金刀比羅宮33年に一度の大祭「平成の大遷座祭」演歌歌手初の神楽殿奉納ライブを行う

19年5月 『大間崎漁歌』 『望郷みれん』

19年6月 東映映画「憑神」出演

21年3月 『女のちぎり』 『男の仁義』

平成22年7月 『人生男節』発売

ユーチューブなどの動画での三山は、なぜかどアップされた顔の、口の動きだけが目立ち、「お前は、カバトットか」とツッコミを入れたくなるような、可愛げがある。どこか、ムーミンを想わせる、風貌である。歌唱力は、その張り付くような高音に、好みは別れるだろうが、ともかくとても上手い。氷川きよし以来、とっていい。三橋美智也や春日八郎などのカバーでは、ときに氷川を越える出来のときもある。育て方を、間違えなければ、かなりな大物になるだろう。

デビュー曲も軽快で、基調のリズムの、タタ タンタン タタ タンタンの繰り返しが快い。4、5回聴くと、誰もが抱える、ちょっとした心の傷は癒されそう。

「人恋酒場」

逢いたいあなたに逢えない夜は 熱燗飲んでも ところが寒い 男の気まぐれ 信じて待つなんて---

(収集プロフィール)

三山 ひろし (みやま ひろし、1980～) 高知県南国市出身の歌手。趣味は、読書・時代劇観賞。好きな言葉は、待てば海路の日和あり。

2004年「NHKのど自慢」高知県土佐清水大会チャンピオン

2005年「ビクター全国歌謡グランプリ選手権」グランプリ獲得

2007年「日本クラウン創立45周年新人オーディション」準グランプリ受賞

歌手を目指し作曲家、中村典正氏の下で修業。

*魅力は、温もりのある声と、抜群の歌唱力。古き良き日本人の心を持ったキャラクター。「人恋酒場」は失恋をテーマにした女歌で、明るいタッチの酒場演歌。

*何かと関係希薄な現代日本に「日本人の心を取り戻させる」演歌歌手を目指している

*最大の魅力ともいえるのはその声の音色。その声の特徴をつぶさにみれば、低音域から高音域まで幅広い響きをもち、温かく、かつ清潔感のある声質ということが言えると思います。人に「安心感」を感じさせ、「活力」を与えるその声は、音のビタミン剤ともいえるもの。その発声力が、安定した歌唱力を支えている。

*昭和の香りがする心温まる歌声。そのすばらしい才能を一段と磨き一直線に進んでほしい。期待の新人。

主な曲

人恋酒場 (詞：仁井谷俊也 曲：中村典正)

望郷列車 (詞：仁井谷俊也 曲：中村典正)

団塊の世代の心に、とても入り込みやすい曲だ。この世代の、成長期から大人になるまでの時期、歌謡界の主流は演歌・歌謡曲系だったが、初期のアメリカン・ロック、プレスリー、ビートルズ、各種のスイング、リズム音楽、シャンソン、ジャズなども、ふんだんに、街やその当時のメディアに溢れていた。この二つの流れを、この曲はうまく取り入れて、ほぼ違和感なく融合させている。別の生き方あったねと、というフレーズが、唄を聴く人々に、さまざまな想いを、起させるのだ。

精進おとしの酒をのみ 別の生き方あったねと---イエスタデイを もう一度 窓の外には ああ
あ 小樽運河

(収集プロフィール)

都はるみ(みやこはるみ、1948年(昭和23年)～)は、歌手。京都府生まれ。洛陽女子高校卒業。実妹も野川明美という芸名で歌手デビューしたが、ヒット曲には恵まれず引退している。歌手なら歌が上手くて当たり前だが、この人の場合はハンパじゃない。テクニックがあるのはもちろんのこと、声に込められる感情量が常人離れしているのだ。60年代から現在まで、第一線で活躍し続けられる要因もそこにある。

64年に、16歳にしてデビューを飾って以来、「アンコ椿は恋の花」「北の宿」など今やジャパニーズ・スタンダードとして有名なヒットを飛ばし、演歌の女王として歌謡界に君臨。しかしその場所に安住することなく、プロデューサー活動をしたり、ワールド・ミュージックのフェスティバル『WOMAD』に参加するなど、新たなチャレンジを厭わない姿は真のリスペクトに値する"アーティスト"といえよう。妥協ができない芸術家肌なだけに、84年に「普通のおばさんに戻ります」との名言を残し引退、ファンを驚かせたりもした。とにかく今も進化し続けている都はるみは、日本音楽界の至宝。

略歴

1964年、『困ることヨ』で、デビュー。同年『アンコ椿は恋の花』が大ヒット、日本レコード大賞最優秀新人賞を獲得する。うなり声のような力強いこぶし回しや、声を震わせるような深いビブラートと繊細な歌唱法が独特で、幅広い表現力を持つ。昭和40年代～50年代にかけて数多くのヒット曲を生み、日本を代表する歌手の一人となった。

1984年、人気絶頂で「普通のおばさんになりたい」と引退宣言(キャンディーズ引退時の有名な言葉を引用した)。この年の紅白歌合戦を最後に引退となる。

1987年、音楽プロデューサーとして活動再開。新人歌手大和さくら、キム・ヨンジャのプロデューサーを担当する。

1989年、サンデープロジェクト(テレビ朝日)に「普通のおばさん代表」として登場。コメンテーター及びスポーツコーナーのレポーターを務めるが、この時期に美空ひばりの訃報に触れ、印象的なコメントを番組内で発表。これを機に歌手復帰を決心する。

1990年、歌手復帰。従来の演歌にとらわれない幅広い作品も歌うようになる。

2004年、デビュー40周年を迎え、コンサートなど精力的な活動を続けている。

ビブラート

これまでは、演歌の場合もちりめんビブラートと呼ばれる細かく、振れ幅の狭いビブラートが主流だったが、彼女は長2度以上、4Hz前後のややゆっくりとした振れ幅が広いビブラートで歌い、聴衆に衝撃を与えた。彼女独特のビブラートの入れ方は、これ以降の演歌のみならず、シャンソン、アイドル歌謡、J-POP等にも大きく影響を与えた。

シングル

アンコ樁は恋の花（1964.10）

涙の連絡船（1965.10）

好きになった人（1968.9）

北の宿から（1975.12）

大阪しぐれ（1980.2）

ミリオンセラー。

浮草ぐらし(1981.1)

ふたりの大阪（都はるみ・宮崎雅、1981.9）

浪花恋しぐれ（都はるみ・岡千秋、1983.5）

夫婦坂（1984.9）

ふたりのラブソング（都はるみ&五木ひろし、1984.12）

小樽運河（1990.6 復帰シングル）

映画

馬鹿っちょ出船（1965年）

アンコ樁は恋の花（1965年）

さよなら列車（1966年）

涙の連絡船（1966年）

北の宿から（1976年）

トラック野郎 望郷一番星（1976年 東映）特別出演・都はるみ役

男はつらいよ 旅と女と寅次郎（1983年、松竹）

この曲は、デビュー「人恋酒場」のCW曲。この2曲の名曲以降、オリジナルではいまいちの曲が続いているのが残念。外部の有力作曲家に依頼するとか、名曲が出来るまでリリースをセーブするという戦略も考慮すべきだろう。三山ほどの歌唱力があれば、股旅物なども、意外と上手くこなせるのでは。さらには、ムード歌謡などへのトライもいい。このままでは、氷川きよしに対抗する逸材が、B級歌手としてあえなく消えていってしまうだろう。この危惧は私だけでなく、多くのファンが持ち、また書いたり口に出していることだ。大手プロの方も、歌謡界の将来のために、ぜひサポートしてあげて欲しい。きっちりパーセンテージを、取ればいいのだから。

カバーの「長崎の女」「長崎の鐘」、竜鉄也の「奥飛騨慕情」などは、氷川よりずっと優れている。ただし「哀愁列車」「古城」「赤い夕陽の故郷」などは、氷川のほうがぐんとい。世評どうり、春日八郎派と三橋美智也派に分かれたけれど。「赤いランプの終列車」は、五分五分。それと、聴いたことはない（三山の歌唱を）けれど、村田英雄の曲は、声質などから、氷川のほうが上手いと思う。

(詞 仁井谷 俊也 曲 中村 典正)

いつでも帰れる故郷が あるから人は頑張れる 土産はないけどおふくろに 元気な姿を見せるのさ 胸の線路を軋ませながら 望郷---

(収集プロフィール)

三山 ひろし (みやま ひろし、1980年9月～) 高知県南国市出身の歌手。

経歴

2004年2月に地元である高知県で開催された「NHKのど自慢」(土佐清水市大会)に出場。「白雲の城」を歌い、その大会のチャンピオンになる。3月には2003年度NHKのど自慢グランドチャンピオン大会にも出場した。その後、作曲家である中村典正(なかむらてんしょう)の下で修業。

2007年7月、「クラウン創立45周年記念新人オーディション」で準グランプリ受賞(グランプリは桜井くみ子)。2009年に「人恋酒場」でデビュー。2010年9月にデビュー曲「人恋酒場」が10万枚を突破しゴールドディスクに認定された。

2011年12月、第53回日本レコード大賞「日本作曲家協会奨励賞」を受賞。

シングル

- 1.人恋酒場(2009年6月3日)
- 2.酔待ち酒場(2010年6月2日)
- 3.ダンチョネ港町(2011年3月2日)
- 4.女に生まれて(2011年11月2日)

アルバム

- 1.歌い継ぐ!昭和の流行歌(2010年3月)
- 2.歌い継ぐ!昭和の流行歌II(2011)
- 3.歌い継ぐ!昭和の流行歌III(2012)

*昨年、自主制作した「ヨコハマ 過ぎ去りし日々は」を、ユーチューブにアップ。初音ミクや鏡音リンに、唄って欲しいのです。ノウハウのある方、ぜひお願いします。2020年末まで、許可不要（演奏・歌唱なども）ですので、皆様ぜひトライしてみてください。

ここでクラシック系を取り上げるのは、ホルスト以来。注目とか、現代の、とか言ったフレーズは、振り払って、3曲ばかり聴いてみた。結果は、想定以上に素晴らしい。無機質な、とか乾いた、とか絶望、とかいった、ありきたりな形容を吹き飛ばす、巨大なプリストル。現代の感覚で捉えた、自伝的ブルームから湧き出てくる、深い衝撃・緊張感・絶望感・スペクタクル・ドラマティック感。

（収集プロフィール）

佐村河内 守（さむらごうち まもる、1963年9月～）広島県出身の作曲家。ラテン文字表記はMamoru Samuragochを使用。

経歴

被爆者を両親として広島県佐伯郡五日市町（現在の広島市佐伯区）に生まれる。佐村河内家は能美島の出で、村上水軍の末裔と伝えられる。4歳から母親からピアノの厳格なスパルタ教育を受ける。その他、幼少からヴァイオリン、尺八、マリンバなどを習い、5歳で「マリンバのためのソナチネ<無の弾効>Op.1」を作曲。小学校（広島市立五日市南小学校）4年生でベートーヴェンのピアノソナタやバッハを弾きこなし、10歳のとき「もう教えることはない」と母親から告げられて作曲家を志望。これ以後は楽式論、和声法、対位法、楽器法、管弦楽法などを独学。中学生時代は音楽求道に邁進する一方で、学年の番長との喧嘩や他校への出張抗争を繰り返す悪童でもあった。

17歳で『交響曲第1番』の作曲に着手。同年から原因不明の偏頭痛や聴覚障害を発症。崇徳高等学校卒業後に上京したが現代音楽の作曲法を嫌って音楽大学には進まず、肉体労働者として働きつつ独学で作曲を学ぶ。19歳の時には失職して家賃を払えなくなり、アパートを追い出されてホームレスとなり、半年間の路上生活を送ったこともある。

1988年、ソロのロック歌手としてデビューしたが、その直後に音楽的理解者だった実弟を交通事故で失ったことがきっかけでプロダクションとの契約を解除。以後もアマチュアのロック歌手としてバンド活動を行っていたが、その頃から聴覚異常を発症し、1989年、健康上の理由でバンドから脱退。1995年から1996年まで道路清掃のアルバイトで生計を立てる。

33歳で映画『秋桜（cosmos）』の音楽を手がける。このとき、左耳は聴力を失っていた。35歳のとき、『鬼武者』のための音楽を作曲し始める直前に聴覚を失って全聾となる。『鬼武者』完成後、自らの聴覚障害を初めて公表。長らく聴覚障害を隠していた理由について、自身は「耳の不自由な作曲家の作品には、同情票がつくであろうこと。それだけはどうしても避けたかったのです」「『聴覚障害を売り物にした』という誤解も避けられないだろう」と説明している。

抑鬱神経症や不安神経症、常にボイラー室に閉じ込められているかのような轟音が頭に鳴り響く頭鳴症、耳鳴り発作、腱鞘炎などに苦しみつつ、絶対音感を頼りに作曲を続ける。特に頭鳴症に

よる耳鳴りについて、佐村河内は「父と母が、そして歴史が聞いた『原爆の音』。それを私の血がいま、聞いているのかもしれませんが」と述べている。光を浴びることで偏頭痛や耳鳴りの発作が誘発されるため、自宅では暗室に籠り、外出時には光を避けるためのつばの広い帽子とサングラスを着用することを余儀なくされている。

1999年、ゲームソフト『鬼武者』の音楽「交響組曲ライジング・サン」で脚光を浴びる。2002年、身体障害者手帳（感音性難聴による両耳全聾、身体障害者等級第1種2級、両耳鼓膜欠落）の交付を受ける。同じ頃から盲児のための施設にてボランティアでピアノを教える（この施設の女兒の一人は、佐村河内が『交響曲第1番』の作曲を再開するにあたり彼に靈感を与え、この作品の被献呈者となった）。

2003年秋、『交響曲第1番』を完成。その直後、病苦から発作的に縊死を図るも未遂に終わる。

2005年8月、『交響曲第2番』を完成。その翌日、再び縊死を図るもやはり未遂に終わる。

2008年9月1日、広島市の広島厚生年金会館ホールで行なわれた「G8議長サミット記念コンサート～ヒロシマのメッセージを世界に～」にて『交響曲第1番』の第1楽章と第3楽章が広島交響楽団により世界初演される。同年、広島市民表彰（市民賞）を受ける。2009年、『交響曲第1番』は芥川作曲賞の選考過程で審査員である三枝成彰が推すも最終候補とならなかった。精神科に通院し、1日に15種類の薬を服用しつつ作曲活動を行っている。2010年4月4日、大友直人指揮の東京交響楽団により、『交響曲第1番』（広島初演版による改訂版）の第1楽章と第3楽章が東京芸術劇場で演奏された。同年8月14日、秋山和慶指揮の京都市交響楽団により、『交響曲第1番"HIROSHIMA"』全曲版が京都コンサートホールで演奏された。

ポップ・ミュージックに対して否定的ながら、ドアーズは例外としている。2010年8月現在、初の愛の曲集となる『3連作弦楽四重奏曲第2番「AKAI-TSUKI」』を作曲中であることを明らかにした。また、2005年に『交響曲第2番』を完成し、2011年7月現在、『交響曲第3番』を作曲中であると発言。

全聾以降の作品

鬼武者《交響組曲ライジング・サン》献呈＝横山勝也

中村鶴城・琵琶リサイタル委託作《詩曲 天の川 琵琶歌と十七弦箏のための》十七弦箏作曲（10分）

二胡と管弦楽による《劇音楽のための主題曲と変奏曲》（17分）

《子供のためのピアノ小品》（25分）献呈＝某障害児施設

《交響曲第1番》（74分・100人を超える大編成のオーケストラで演奏される巨大な交響曲。）

ピアノ幻想曲《ジ・エターナル》（27分）

《ピアノ・ソナタ第1番》（36分）献呈＝持田正樹

オルガン組曲《アシュリー》（14分）献呈＝アシュリー・ヘギ

和楽と管弦楽のための《死霊I-IX》（全270分）

《交響曲第2番》（110分）

ピアノのための《死霊・第1章》（13分）

《弦楽四重奏第1番》（32分）

《吹奏楽のための小品》（7分）献呈＝石田修一と千葉県柏市立柏高等学校吹奏楽部
NHK『五木寛之 21世紀・仏教への旅』献呈＝五木寛之
二管編成の音楽《ヒロシマ》（22分）献呈＝原爆被爆者
《交響曲第3番》2007年当時作曲中
《CRASH MIND TOWER》
《左手のためのピアノ小品<MIKU(1)>》
映画音楽 [編集] 『秋桜（cosmos）』（「秋桜」組曲）
『六悪党』
ゲーム音楽
『バイオハザード (D.S)』（バイオハザードシンフォニーOp.91「CRIME AND PUNISHMENT」）
『鬼武者』（交響組曲「RISING-SUN」）
テレビ音楽
NHK『山河憧憬』（チベットゴングと尺八のための幻想組曲Op.75）
中国2001年のテレビドラマ『呂布与貂蝉』（テーマソング。監督はチェン・カイコー、呂布役は黄磊、貂蝉役は陳紅
CD [編集] 『21世紀の吹奏楽「響宴XI」～新作邦人作品集』（「吹奏楽のための小品」を収録）
ブレーンミュージック
『交響詩「ローマの祭」／神奈川大学吹奏楽部』（「吹奏楽のための小品」を収録）CAFUA
『「鬼武者」オリジナル・サウンドトラック～交響組曲「ライジング・サン」』セルピュータ
『バイオハザードシンフォニー』セルピュータ
『交響曲第1番 HIROSHIMA』日本コロムビア（大友直人指揮・東京交響楽団）
『シャコンヌ～弦楽作品集』日本コロムビア（大谷康子、藤井一興、大谷康子弦楽四重奏団）
著書
『交響曲第一番』（講談社、2007年）

* 交響曲第1番《HIROSHIMA》（コロムビア創立100周年記念作品）

全ての聴力を失う絶望を経た作曲家、佐村河内守が完成させた《交響曲第1番》。

中世以来の西洋音楽の歴史を包含し、ブルックナー、マーラー、ショスタコーヴィチ等、ロマン派シンフォニストの系譜を受け継ぐこの交響曲は、佐村河内の出自（被爆二世）が反映された自伝的作品でありながら、「闇が深ければ深いほど、祈りの灯火は強く輝く」という作曲者の言葉に象徴されるように、東日本大震災の惨禍を経験した私たち日本人の心にも深く通じる、魂を救う真実の音楽といえましょう。危険を感じる大きな余震が続く中での録音セッション。大オーケストラが、大友のタクトのもと、まさに一塊の火の玉となり燃え上がるさまは圧巻の一言です。最終楽章、苦しみと闇の彼方に、希望の曙光が降り注ぐ。 「現代に生まれた奇跡のシンフォニー」を、お聴きください。

* 米TIME誌では『現代のベートーヴェン』として特集を組まれる孤高の天才作曲家。現代でここまで書ける人は、世界で佐村河内しかいない、とされています。

*日本コロムビアから2011年7月にリリースされた、佐村河内守の交響曲第1番「HIROSHIMA」が、発売から1年半あまり経過したいま、にわかに脚光を浴びている。Amazonの総合チャートで1位となり、iTunesの総合でTOP5にランクインするなど、クラシックでは異例のヒットとなっている。

*文芸社から「華の昭和名歌150選」を発売中。ネット、中古も可。

*期待される「平成&平成メンズ。G30」ジャンル等、幅広く選択しました。

「平成。グリンプス30メンズ」

竹島宏・ジェロ・福崎エリック・松田敏来・山内恵介・清水翔太・フォレスト・清水博正・逢川まさき・市川たかし・長谷川真吾・岩出和也・柏木タカシ・大江裕・kenjiro・山川豊・黒川真一朗・大地誠・松原健之・秋川雅史・錦織健・宇都宮さだし・三山ひろし・走裕介・福田こうへい・東京大衆歌謡楽団・こおり健太・ル・ヴェルベッツ・木山ゆうじ

「平成。グリンプス30」

山口ひろみ・井上由美子・大沢桃子・池内ゆかり・水田竜子・島津亜矢・市川由紀乃・大黒裕貴・林あさ美・神園さやか・上杉香緒里・椎名佐千子・真木ことみ・桜井くみ子・森山愛子・松川美樹・永井裕子・みずき舞・たむらばん・菊池まどか・かつき奈々・南かなこ・フォレスト（女声）・小桜舞子・瀬口悠希・花咲ゆき美・金澤美咲・川野夏美・山本智子

「ネオ・ルネッサンス☆21世紀」

真木柚布子・三代沙也可・水沢明美・夏木綾子・岡ゆう子・北野まち子・秋山涼子・北見恭子・あさみちゆき・服部浩子・門倉有希・西尾夕紀・多岐川舞子・音羽しのぶ・永井みゆき・田川寿美・谷本知美・サエラ・中島ゆきこ・大石まどか・浅田あつこ・椎名佐千子・山本みゆき・山口かおる・

秋岡秀治・加門亮・池田暉郎・加川明・渡辺要・加納ひろし・北岡ひろし・小金沢昇司・半田浩二・木原たけし・西方裕之・三浦わたる・鈴木一平・坂井一郎・新二郎・三田りょう・川崎修二・ロベルト杉浦・岡大介・北川大介・奥山えいじ・木山裕作・対馬一誠

あとがき

平成名歌Ⅰ・Ⅱと、Ⅴは、Jポップ系を収録する予定です。Ⅲ・Ⅳは、演歌・歌謡曲系を収録します。なにぶん、現在進行中の世界ですので、完成はお約束できませんが、出来上がったものは、楽しんで頂ければ、と思っています。万華鏡のように、広大な世界を、めまぐるしく変化する、美しい華を堪能してください。

*昨年、自主制作した「ヨコハマ 過ぎ去りし日々は」を、ユーチューブにアップ。初音ミクや鏡音リンに、唄って欲しいのです。ノウハウのある方、ぜひお願いします。2014年末まで、許可不要（演奏・歌唱なども）ですので、皆様ぜひトライしてみてください。

*「華の昭和名歌150選」\1、155が、文芸社から発売中。古書店、ネットも可。

*お知らせ

演歌・歌謡曲系若手（インディーズ系・P版での活動者を含む）歌手たちをメインに、男女30名ずつを選んで「平成。グリップス30」を、「華の平成名歌」に登録。また「ネオ・ルネッサンス50」も新設。メジャーへのサポートに、どんどんどご使用下さい。

*期待される「平成&平成メンズ。G30」。ジャンル等、幅広く選択しました。

*「平成。グリップス30メンズ」

竹島宏・ジェロ・岡大介・鈴木一平・松田敏来・北川大介・山内恵介・清水翔太・木山裕作・清水博正・逢川まさき・市川たかし・長谷川真吾・岩出和也・柏木タカシ・大江裕・kenjiro・山川豊・黒川真一郎・大地誠・松原健之・三田りょう・秋川雅史・錦織健・宇都宮さだし・三山ひろし・坂井一郎・福田こうへい・東京大衆歌謡楽団・こおり健太

*「平成。グリップス30」

山口ひろみ・井上由美子・大沢桃子・池内ゆかり・水田竜子・島津亜矢・市川由紀乃・大黒裕貴・林あさ美・神園さやか・上杉香緒里・椎名佐千子・真木ことみ・桜井くみ子・森山愛子・松川美樹・永井裕子・みずき舞・たむらばん・菊池まどか・かつき奈々・南かなこ・山口かおる・小桜舞子・瀬口悠希・花咲ゆき美・金澤美咲・川野夏美・山本智子

*ネオ・ルネッサンス50

真木柚布子・三代沙也可・水沢明美・夏木綾子・岡ゆう子・北野まち子・秋山涼子・北見恭子・あさみちゆき・服部浩子・門倉有希・西尾夕紀・多岐川舞子・音羽しのぶ・永井みゆき・田川寿美・谷本知美・サエラ・中島ゆきこ・大石まどか・浅田あつこ・山本みゆき・

秋岡秀治・加門亮・池田暉郎・光岡洋・加川明・加山こうじ・渡辺要・クレイジーケンバンド・加納ひろし・北岡ひろし・小金沢昇司・鈴木雅之・半田浩二・永井龍雲・木原たけし・西方裕之・三浦わたる・野上こうじ・おおい大輔